

塔原廃寺

筑紫郡筑紫野町大字塔原所在古代廃寺跡の調査

福岡県文化財調査報告書

第 35 集

1 9 6 7

福岡県教育委員会



塔 原 廃 寺

筑紫郡筑紫野町大字塔原所在古代廃寺跡の調査

序

この報告は、本年度、福岡県教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査のうち、重要と思われるものの一つに関するものである。わが国古代文化研究の一資料として活用いただければ幸甚である。

なお、本書の刊行にあたり、現地調査から本書の刊行まで、終始尽力いただいた小田富士雄、鶴久嗣郎、前川威洋の調査員各位と、ご指導たまわった鏡山猛、太田静六、森貞次郎、鳥山隆三各福岡県文化財専門委員に深甚の謝意を表す。

昭和 42 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会

例 言

1. 本書は、県道福岡～二日市線新設に関連して、緊急調査した埋蔵文化財の報告書であるが、8、9月の調査報告を主体とした。

2. 本書の執筆は次のとおりである。

第1	……………	松岡史
第2	……………	石松好雄
第3	……………	小田富士雄
第4—1・2・3	……………	宮小路賀宏
第5	……………	小田富士雄
第6—1・2	……………	宮小路賀宏
第7—1・2	……………	小田富士雄
付1	……………	小田富士雄
付2	……………	宮小路賀宏

3. 掲載の写真はすべて小田富士雄調査員の撮影によるものである。なお、実測図の製作者は、それぞれの挿図目次のところに示すとおりである。

本文目次

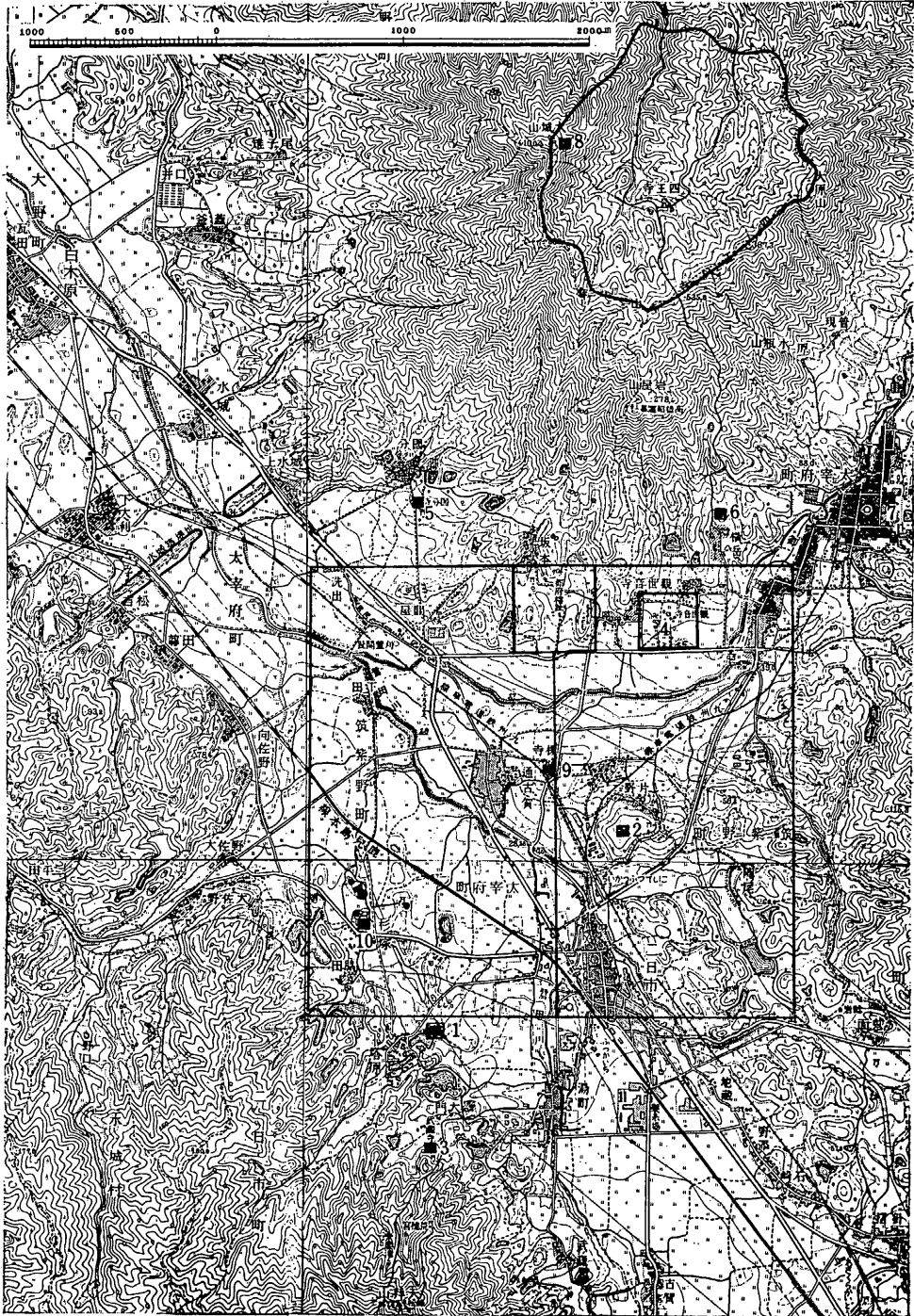
第1	はじめに	2
第2	位置と環境	3
第3	研究史	4
第4	調査の経過	6
1.	調査経過の概要	6
2.	道路敷設地区	8
3.	537番地地区	9
4.	538番地地区	9
第5	塔心礎	10
第6	遺物	12
1.	古瓦	12
2.	土器	15
第7	塔の原廃寺をめぐる諸問題	16
1.	般若寺創立問題	16
2.	塔心礎と瓦当文の系統	17
付1	塔原廃寺関係文献目録	21
付2	武蔵寺伝説 一塔原廃寺の周辺一	21

図 版 目 次

	本文対照頁
PL 1 遺跡全景	6
2 A 第1トレンチ1～15区東壁と発掘終了後の状況	6・8
B 第1トレンチ3区瓦溜出土状態	9
3 A 第2トレンチ西壁の土層	9
B 第4トレンチ北壁の土層	9
4 A 塔心礎全景	9
B 塔心礎と第2トレンチの土層調査状況	9
5 A 第3トレンチ及び拡張区の遺物出土状態	9
B 第3トレンチ西壁の土層及び拡張区の状態	9
6 A 第3トレンチ7～8区古瓦出土状態	9
B 第1トレンチ15区軒丸瓦片出土状態	8・9
C 第1トレンチ14区长頸壺片出土状態	8・9
7 A 第3トレンチ7区軒丸瓦出土状態	9
B 第3トレンチ8区軒平瓦出土状態	9
C 第3トレンチ8区軒平瓦出土状態	9
D 第3トレンチ拡張区須恵器出土状態	9
8 出土古瓦 軒丸瓦	12
9 出土古瓦 軒丸瓦	12
10 出土古瓦 格子目文の各種	12・13

挿 図 目 次

1. 塔原廃寺跡附近遺跡分布図（国土地理院地形図1：25000、石松作製）	1
2. 「高木神」台石に転用された礎石	4
3. 塔心礎附近字図（「飛鳥時代寺院址の研究」、一部宮小路記入）	5
4. 第1トレンチ発掘作業風景	6
5. 塔心礎附近トレンチ配置図（鶴久・前川測、前川製図）	7
6. 塔原廃寺跡附近地形図 （鶴久・前川・大久保設計測量KK測、大久保設計測量KK製図）	
7. 第2トレンチ西壁土層図（小田・宮小路測、小田製図）	8
8. 土層実測図（小田・宮小路・石松測、小田・前川製図）	
9. 塔心礎実測図（小田・宮小路測、小田製図）	11
10. 出土軒先瓦実測図（小田・宮小路測、宮小路製図）	13
11. 出土土器実測図（石松測、石松製図）	14
12. 塔原廃寺と大和・禅寂寺の塔心礎舍利穴	17
13. 塔原廃寺関係遺跡分布要図（小田作製）	18・19
14. 北部九州出土山田寺系古瓦	20
15. 武蔵寺境内出土軒先瓦	22



第 1 図 塔の原廃寺跡附近遺跡分布図 (●、▲は古墳)

- 1—塔原廃寺、2—般若寺、3—武蔵寺、4—観世音寺、5—筑前国分寺、6—崇福寺、
7—安楽寺、8—四王寺、9—榎寺、10—杉塚廃寺

第 1 はじめに

今回、福岡県教育委員会主催の塔原廃寺跡の発掘調査の端緒となったのは、県道福岡～二日市線の新設による。すなわち国道3号線のまひ状態解除のため、福岡市から筑紫野町大字二日市にいたる間に県道を新たに設定したわけであるが、この県道が国指定史跡「塔原塔跡」（昭和14年9月7日指定）のすぐ西横を通ることを、県教育委員会で知ったのは昭和39年の夏前であった。その後、建設計画の変更によって、実際にこの部分を着工するようになったのは、昭和40年秋であった。

当然、当代の寺院の境域の主要部を通過するわけである。したがって、県土木部の道路建設課と打合わせ、また文化財保護委員会の指示もあって、側溝部分だけを一応調査し、寺院境内の主要部が予想される長さ約100mの道路面の工事を中止した。昭和41年度に発掘調査をして、その結果によって建設することになったのである。

この新設道路は、この寺院境内推定地域では、大部分が現状の田畑面に道路面がつくられる予定で、著しい地下遺構の損傷は考えられないが、道路になると、将来、遺構調査は不可能であり、かつ側溝部位だけは、地下平均約50cm程度掘さくするので、発掘調査して記録保存の措置をこうじたわけである。

40年度の側溝部分の調査は、41年2月に6日間、県教育庁社会教育課の松岡史技師と渡辺正気文化財係長が、那阿土木事務所の協力を得て、実施した。

しかしこの調査は、日時の関係で、道路両側の側溝と、灌がいのために道路面を横断させた2本の水路の断面との観察、および1ヶ所の坪掘りにとどまった。東側の側溝の断面に、瓦溜1ヶ所と、礎石の大きな抜取り状の新しい土の落ちこみを数ヶ所発見した。瓦溜には軒先瓦を含む多数の白鳳～奈良初期の古瓦類が一括してつまっていたが、ガラス片なども混在し、新しい埋設であった。礎石ぬきとり状のものもまた、断定するには躊躇するものがある。これらは、今回の本調査の所見に追加するほどのものがないので、一切省略する。

ついで、昭和41年の盛夏にいたり、道路建設の予定もあり、予算措置も出来て、8月26日から9月14日までの今回の発掘調査となったのである。調査参加者は次のとおり。

九州大学 文学部 小田富士雄、前川 威洋

久留米 高等学校 齋久 嗣郎

福岡県教育委員会 宮小路賀宏（調査主任）、石松 好雄、中村 一世（経理担当）

なお、鏡山猛、太田静六の両福岡県文化財専門委員には、今回の調査のみならず、2月の予備調査にも現地指導をいただいた。また森貞次郎、鳥山隆三の両福岡県文化財専門委員とは2月の予備調査に現地指導をいただいた。

最後に、今回の調査にあたっては、筑紫野町役場、同教育委員会、土地所有者、地元関係者各位から多大の援助をお受けしたことを明記し、厚く謝意を表するものである。また県土木部道路建設課の理解あるご協力にも部内ながら併せて謝意を表する。

第 2 位置と環境 第1図参照

塔原廃寺跡は福岡県筑紫郡筑紫野町大字塔原字原口にある。筑紫野町と太宰府町は現在は二町分立しているが、いわゆる太宰府時代には両町にまたがる都市計画がなされ、共に栄えた西の都である。ここは、福岡市の中心街から東南に約15mの所に位置し、地形的には、西南から標高1500mの背振山塊が、また東北からは宝満、三郡、若杉の三山を擁する三郡三塊がせまっている。

博多湾にのぞむ筑紫平野は太宰府町附近で急に狭くなり、幅2km程の帯状となる。現在国鉄大牟田線および国道3号線が通過しており、福岡から筑後、肥後方面に通ずる陸上交通の重要な路線となっていて、古代においても幹線通路であった。

遺跡は、太宰府町の南方、背振山塊の東北端にある標高257mの天拝山麓に位置している。太宰府町は周知の如く奈良時代から平安時代にかけて平城京、平安京と並び称せられるほどの一大都市をなしていたのであり、太宰府政庁跡及び政庁関係の遺跡や寺院跡がある。この地には観世音寺古文書や現在も残る地名等から条坊制が存在していたことが明らかで、その規模は60間四方一区劃とする東西24坊、南北22条の広さであったと推定されている(註)。その中心となるのが現在国の特別史跡に指定されている太宰府政庁跡である。

政庁跡内には蔵司、匠司、漏刻台跡等、また関係遺跡として政庁の東隣に学校院跡がある。

次に寺院跡関係については、遺跡の明瞭でないものを含めて十指を超える。

まず第一に、太宰府政庁跡の東方には観世音寺跡、西北方には国分寺跡がある。西鉄二日市駅のすぐ北の小高い台地には、塔原廃寺跡と密接な関係が考えられる般若寺跡がある。現在は塔心礎を残すのみであるが、戦後間もない頃までは基壇の残存が認められていたという。現在では民家が建ちならび見るかげもない。この般若寺跡の西北には菅原道真公塾居の跡といわれる榎寺跡、さらに塔原廃寺跡の北方杉塚部落のなかには杉塚廃寺跡があり、現在数個の礎石とともにわずかながら基壇の残存が認められ、出土遺物により奈良時代の寺院跡と推定されている。

菅原道真公を祀っている。太宰府神社は安楽寺跡でもある。「安楽寺草創日記」によれば平安末期には多くの堂塔があったことがわかる。

また太宰府防衛の羅城として最も重要な三つの遺跡がある。天智天皇3年(664)及び4年に、府の西北に水城、北の大野城、南の基肄城がある。大野城跡はまた四王寺山とよばれる如

く宝亀5年(774)に四天王捨像が安置された円満山四王寺跡でもある。

以上のような環境の内にいち早く塔原廃寺は存在していたのであるが、現在は一個の塔心礎を残すのみであって、その他の痕跡すらもとどめておらず附近一帯は水田、畑地となっている。また原口池の堤防が心礎のすぐ近くまでせまり、この溜池と心礎の間をこの調査の原因となった県道5号線が巾広く通過予定されているのである。

註 鏡山猛「太宰府の遺跡と条坊(其二)」(史淵第17輯)1937

第 3 研 究 史

塔原廃寺の所在が知られるようになったのは、巨大な塔心礎が露出した状態で古くからこの地にのこされていたからである。それは塔原村の名称が現在までひきつがれていることからうかがわれるが、元禄16年(1703)に成った貝原篤信の「筑前国続風土記」の「塔原」項に

村の前なる圃の中に、十王堂の址あり。今に礎のこれり。其所を今も十王堂と云。むかし此所に塔あり。遠くより能見ゆ。此塔ある故に塔原といひしとかや。(巻之九・御笠郡下)と



第 2 図 「高木神」台石に転用された礎石

あって地名の起源にふれ、また十王堂の跡という伝承がすでにこの頃成立していたことがうかがわれる。またこの遺跡は東南天拝山麓にある武蔵寺創草の地にあてる伝承があって、いつ頃から附会したものか明らかでない。

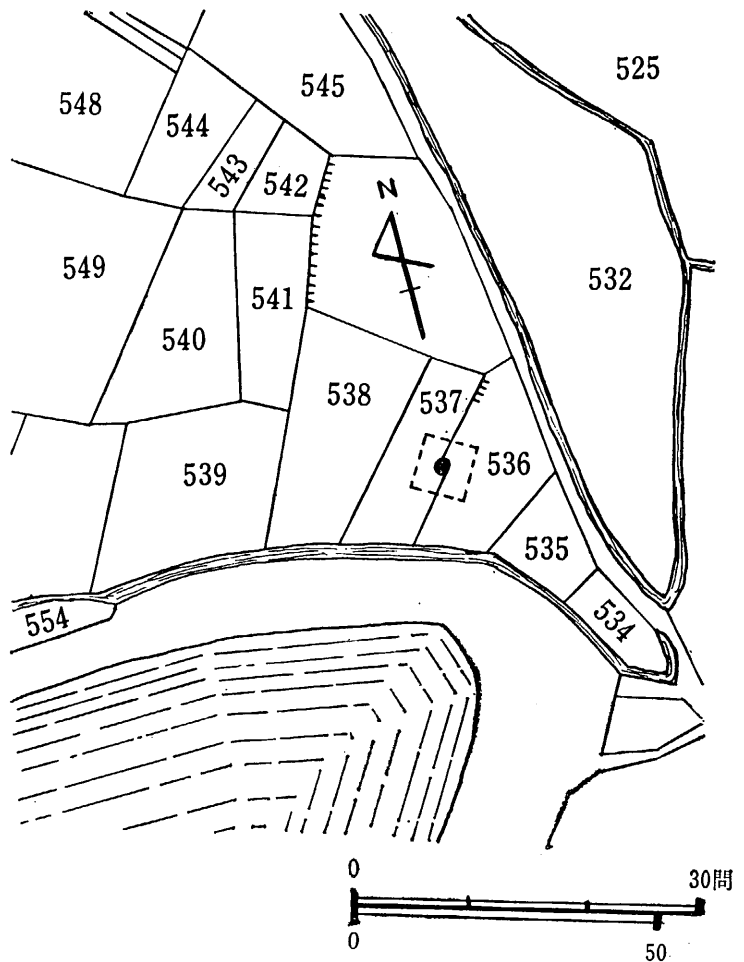
遺跡は古くから畠地になっていた関係上、古瓦の出土も早くから注意にのぼり、武蔵寺をはじめ二、三所蔵するところがある。また今回の周辺調査によって塔原部落内の森山秀治、権藤源一郎両氏宅の庭石に礎石とおぼしき花崗岩が各々一個発見されたが、部落南方の太行事山の「高木神」碑台石にも礎石を転用しており石碑に「明治十一寅九月」とあるので、礎石を動かした時期も察せられる。十年前に遺跡を踏査した際に聞いたところでは今回発掘した地域の北側にあたる539~541番地(第3図)の

水田には礎石が並んでいたということであった。従ってもこの地には礎石があって、それが運び去られたのは明治11年(1878)以前ということになる。また礎石の大部分は遺跡のすぐ南にある原口池を築成した際に割って使用したという口伝があるので、今回部落の最年長者である渡辺要次郎氏(明治11年生、89才)にうかがったところ、原口池の築造は氏の記憶以前であり、従って明治11年以前という同一の結果をえた。更に原口池の造成中に多くの古瓦が発見されたという口伝もある。

武蔵寺に蔵するこの遺跡の古瓦をはじめて学界に紹介されたのは故中山平次郎氏である(1)。大正5年(1916

)のことであった。しかし遺跡についての調査報告は昭和時代に入り石田茂作博士の仕事ではじめて総合的な調査結果がえられたのである(2)。石田博士は本遺跡が武蔵寺創草の地であり、現在の武蔵寺は復興されたものであろうとする通説を支持し、塔心礎もほぼ原位置のままであろうと考えられた。しかし一方では心礎が536番地と537番地の境界に在り、やや傾斜しているために原位置より動いているのではないかという疑問も出されていて、両説が未解決のまま今日まで持ちこされてきたのである。従って今回の調査は塔心礎と若干の古瓦資料以外に手がかりを欠いていた本遺跡をはじめて発掘する機会に恵まれると共に、年来の疑問にも結論をうることとなった。

註 (1)中山平次郎「古瓦類雑考(4)」(考古学雑誌7巻4号)1916
 (2)石田茂作「武蔵寺」(飛鳥時代寺院址の研究所収)1936



第3図 塔心礎附近字図

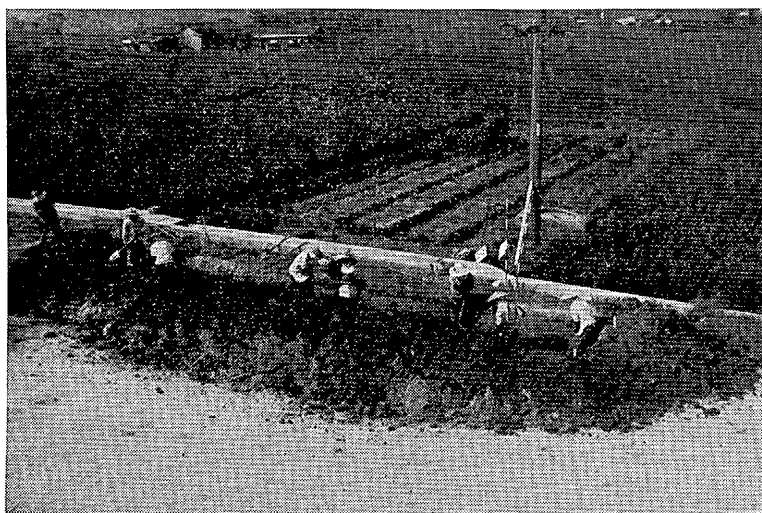
(「飛鳥時代寺院址の研究」より引用、点線内は指定地区)

第 4 調査の経過

1. 調査経過の概要

発掘調査は昭和41年8月26日から9月14日まで行なわれた。

調査は、道路敷設地区を主体としていたので発掘可能範囲は極めてせまかったが、期間が限られていたので、トレンチ調査により遺構発見を行ない必要に応じて拡張する方法をとった。



第 4 図 第1トレンチ発掘作業風景

〔8月26日〕小田、宮小路は午前8時に現地に到着し、発掘地を選定しながら作業員の集合を待った。作業日程は、午前9時から午後6時までとし、途中15分の小休止2回と2時間の昼休みを設けた。

調査は道路敷設地区から開始することと

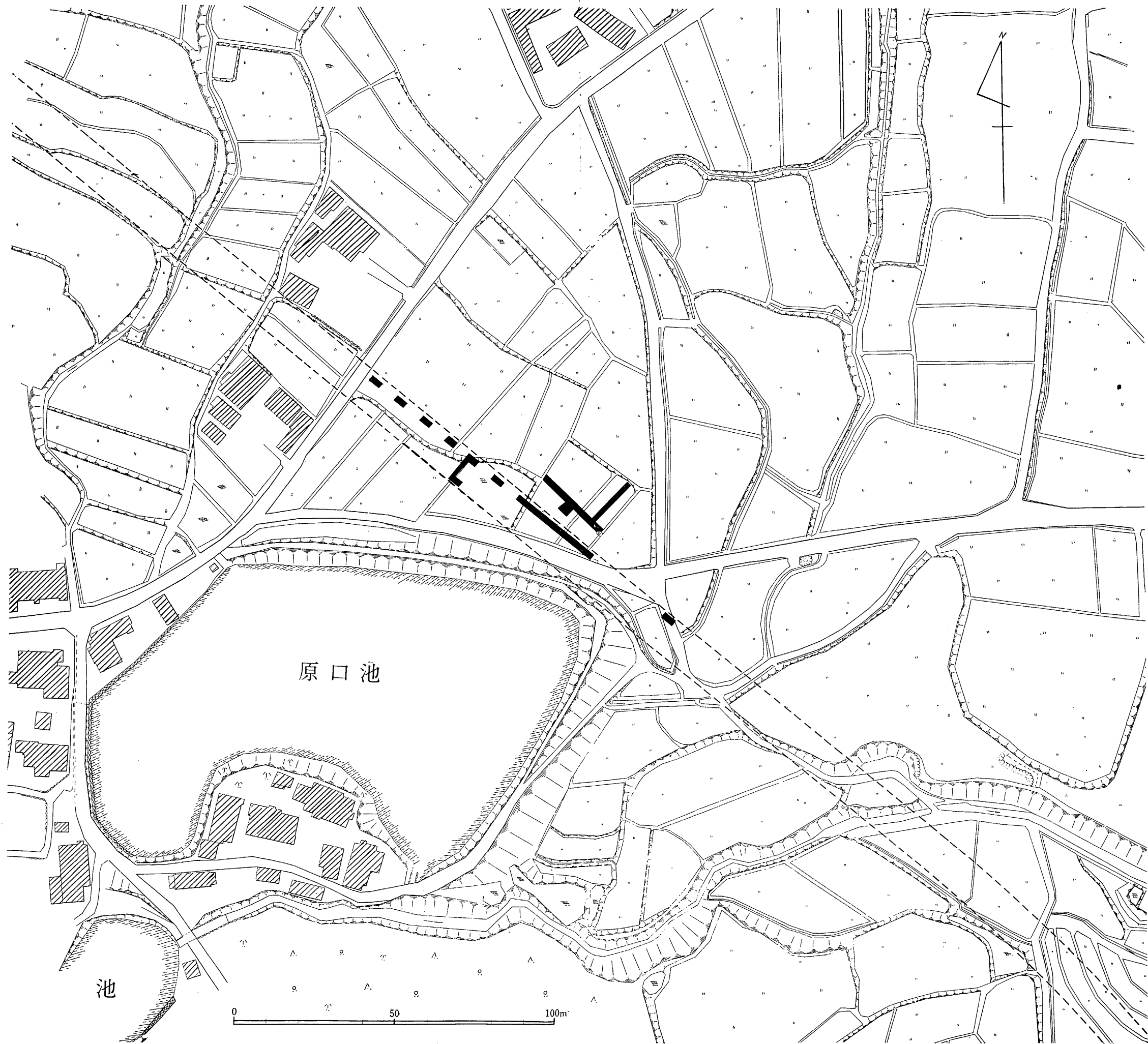
し、道路東側側溝より1 m北に離して平行に巾2 m、長さ90 mの第1トレンチを設定した。さらに南端から2 mの巾で切り、分けけすることとした(第1トレンチは45区に分れる)。

なお、現地より約700 m東にある筑紫野町公民館入口の等高点(海拔33.33 m)より調査地区の道路の東側側溝南端にレベルを移した(44.333 m)。

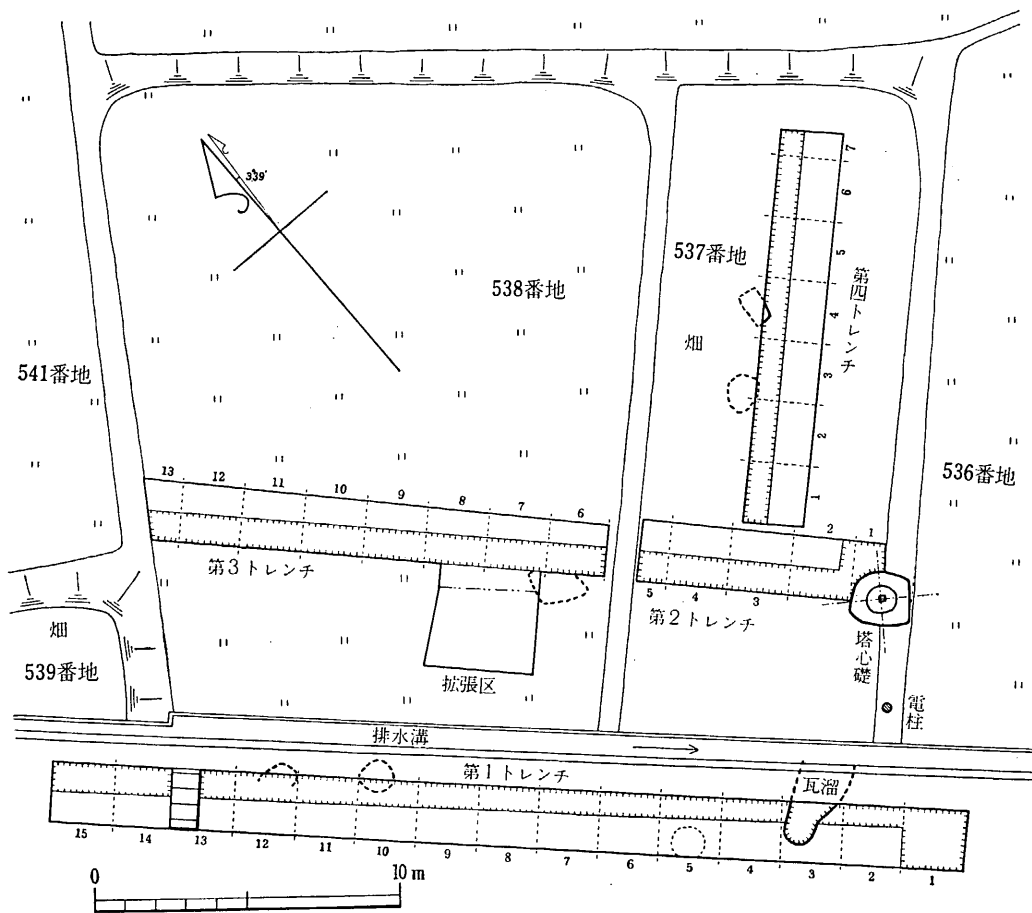
〔8月31日〕なお第1トレンチの発掘を継続しながら、小田と宮小路は塔心礎の10分の1大の実測、竊久は600分の1大の地形測量を開始する。筑紫豊福岡県文化財専門委員の来訪があった。

〔9月1日〕第1トレンチは、15区までの調査の結果、遺物は極めて少量であり遺構も現われないので、15区より北方は6米毎に4米の発掘区(計6個所)を設定し坪掘りすることにする。

また、537番地(第3図参照)の畑地に、塔心礎と土層の関係を調査できるように心礎を半分かけた巾2 m、長さ7 mの第2トレンチを設定した。第2トレンチも南端より2 mづつに分けける。600分之1の地形測量は、竊久1人では手が足りないので、九州大学考古学研究室大



第 6 图 塔原廢寺跡附近地形图



第5図 塔心礎附近トレンチ配置図

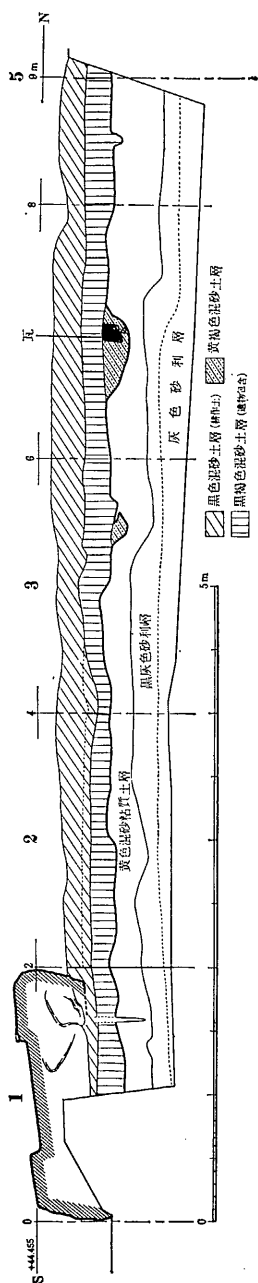
学院学生前川威洋君にて本日より援助していただくことにした。

鏡山猛教授の御指導があった。

〔9月2日〕第1トレンチ14、15区は湧水のため中止していたが本日掘り上げ、第1トレンチの発掘を完了し、東側壁面の清掃にかかる。第1、第2トレンチを見ながらの塔心礎実測図も完了。

〔9月3日〕本日第2トレンチの延長上（北方538番地水田）に第3トレンチを設定し、小田、宮小路がこれに当たった。このトレンチの区分けは第2トレンチに引続くことにする（第2トレンチは1区～5区まで、第3トレンチは6区～13区まで）。鶴久、前川担当の600分の1地形測量は、測量範囲が拡大なため困難を極める。鏡山教授の現地指導があった。

〔9月4日〕第3トレンチ7、8区に古瓦類の散布が見られたので石松が作業員を使用してこれに当たった。小田と宮小路は第2トレンチの土層図（ $\frac{1}{20}$ ）を作成し、次いで第1トレンチの



第7図 西壁土層断面図

土層図作成準備を行なう。太田静六教授の現地指導があった。
〔9月5日〕第3トレンチ7、8区の瓦類の集積範囲を追求すべく、西側に4平方メートルの拡張区を設けたところ、耕作土下になを遺物の集積状況があらわれて、第3トレンチ7、8区の集積部が西側にのびていることが知られた。

〔9月7日〕537番地に第2トレンチと直角な第4トレンチを設定する。このトレンチも西側より2mづつ区分けする。耕作土下にピットが3ヶ所に見られ、その内両端の2つのピットが同性質の状態であることが観察され、注意を引いた。第3トレンチ7、8区及び拡張区の10分の1平面図を石松作成する。霧久、前川は600分の1地形測量測量を継続しながら100分の1の発掘箇所部分図を作成。

〔9月8日〕道路敷設地区の第1トレンチの延長（南に29m）に2×4mの発掘区、また19、20区に対応する西側に2×4mの発掘区を設定し両者の間（6.2m）を巾2mで連結して掘りすすめた。

本日昼休み中に、第3トレンチに出土していた軒丸瓦及び平瓦各2枚が盗難にあった。35mmによる近写があったのは不幸中の幸せであった。

〔9月11日〕ほぼ全ての発掘の実測及写真記録を終り、第2、第3トレンチの埋め戻しをはじめめる。

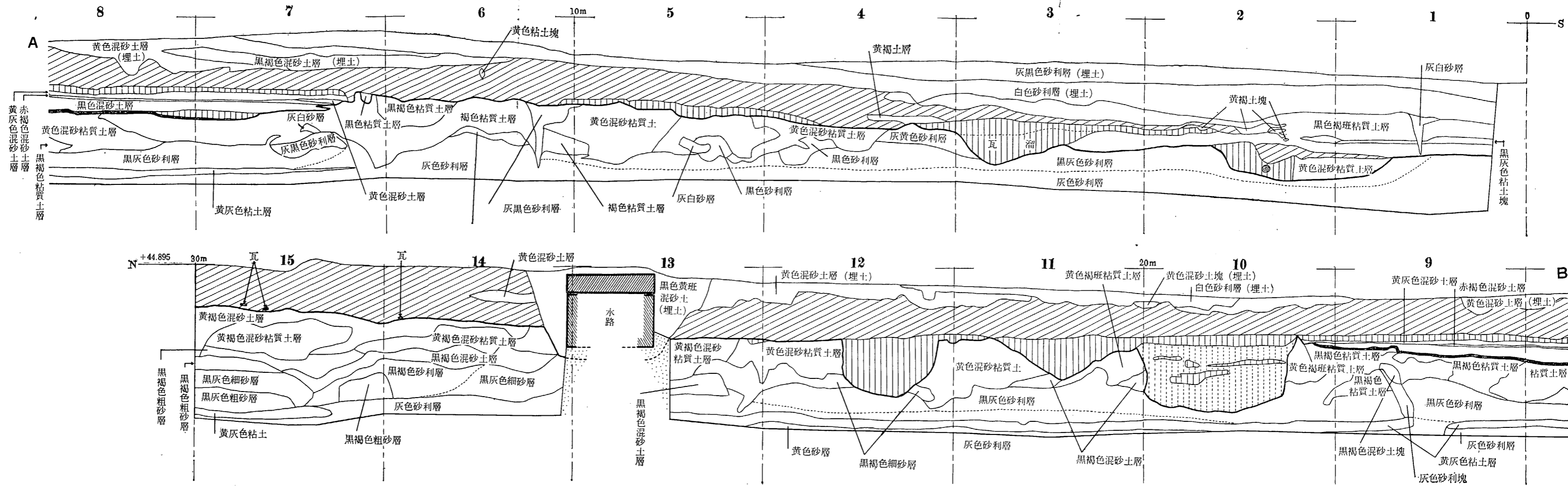
〔9月13日〕現地調査は全て終了し、埋め戻し作業のみになったので、小田と宮小路は周辺調査を行なった。現在沓ぬぎ石に転用されている礎石2個及び石碑の台石に転用されている礎石1個を調査した。また塔原部落最年長者である渡辺要次郎氏から遺跡附近の事情を聴取した。石碑の銘文及び渡辺氏の談話によれば、遺跡が破壊されたのは明治11年以前、また原口池もそれ以前の築造であることがわかった。

現地調査は、出土遺物運搬の作業を残すのみとなり、明日宮小路がこれに当たることとなった。

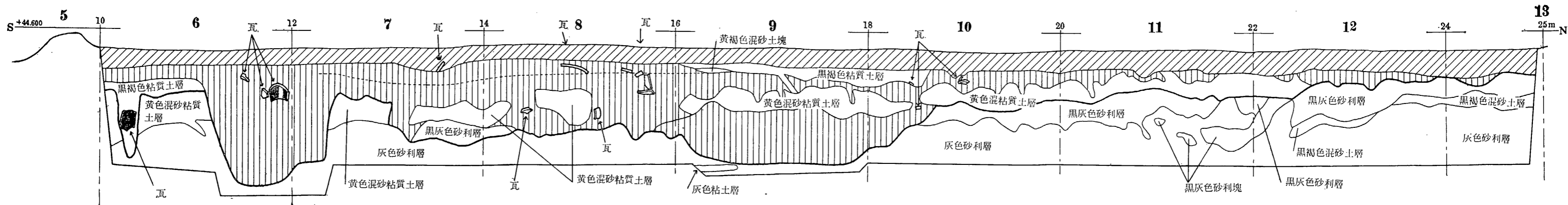
2. 道路敷設地区

調査はこの地区を主体としていたので、まずここに巾2m、長90mの第1トレンチを設定し

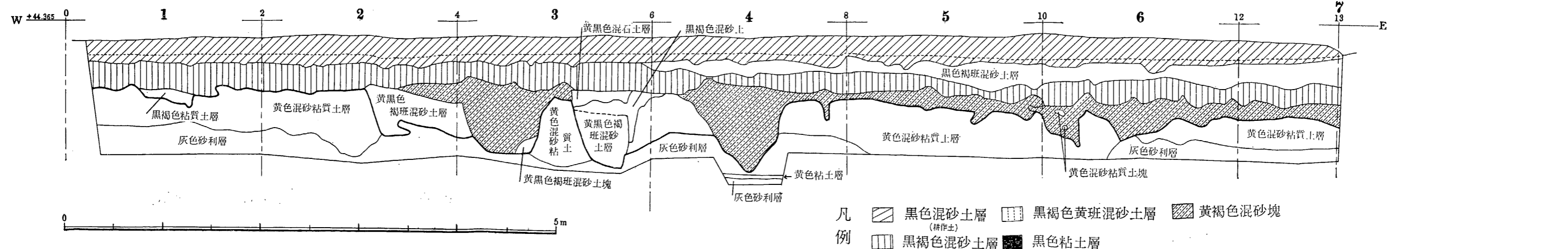
1. 第3トレンチ東壁土層図



2. 第3トレンチ西壁土層図



3. 第4トレンチ北壁土層図



凡例

	黑色混砂土層		黒褐色黄班混砂土層		黄褐色混砂土塊
	黒褐色混砂土層		黒色粘土層		

第8図 土層実測図

た。2 m毎に区分けしたので計45区となるが、15区まで調査した結果目立った遺構の発見がないので、以後は第6図のごとく坪掘りを行なった。道路面にはすでに土盛りが行なわれている部分があり、その下に耕作土層があらわれる。土層は第8図に示すごとく非常に複雑で、遺物は14区15区の黒色混砂土層（耕作土層）下面に若干数出土した。よって文化面はこの層下面と考えられる。このほかは3区の瓦溜から出土した以外は遺物の発見はなかった。10区12区に礎石等の抜穴かと思われるピットが観察されるが、なおその性格は不明である。下層部は砂層と粘質土層が交互に推積している。

3. 537番地地区

この537番地は、調査時は畑地であったが、本来は水田である。ここには第2トレンチと第4トレンチを設定した。第2トレンチは1区～5区までで、6区～13区は便宜上第3トレンチと呼称した。

第2トレンチの断面（第7図）には、文化層は第2層（黒色混砂土層）下面にあらわれ、遺物も若干数発見された。このトレンチは、塔心礎が創建当初のままの状態であるかを確かめるために設定したものである。断面土層によれば、塔心礎は黒色混砂土層（耕作土層）中にあり、黒褐色混砂土層（遺物包含層）よりもはるか上部にあるため明らかに動かされたものであることがわかった。

塔心礎が移動していることが判明したからには、これの本来の位置を発見するために、第3、第4トレンチを設定した。

第4トレンチ断面土層（第8図3）にあらわれた文化面（1区、2区において第2層下面）は変化に富み起伏がある。3区4区の断面にピットが4ヶ所観察される。左右両端は、ピット内の土質により同じ性格のものと考えられるが、第1トレンチのピット同様その性格は明らかでない。

4. 538番地地区

ここには、古老の語るところにより、遺構の発見があるのではないかと期待される所であった。

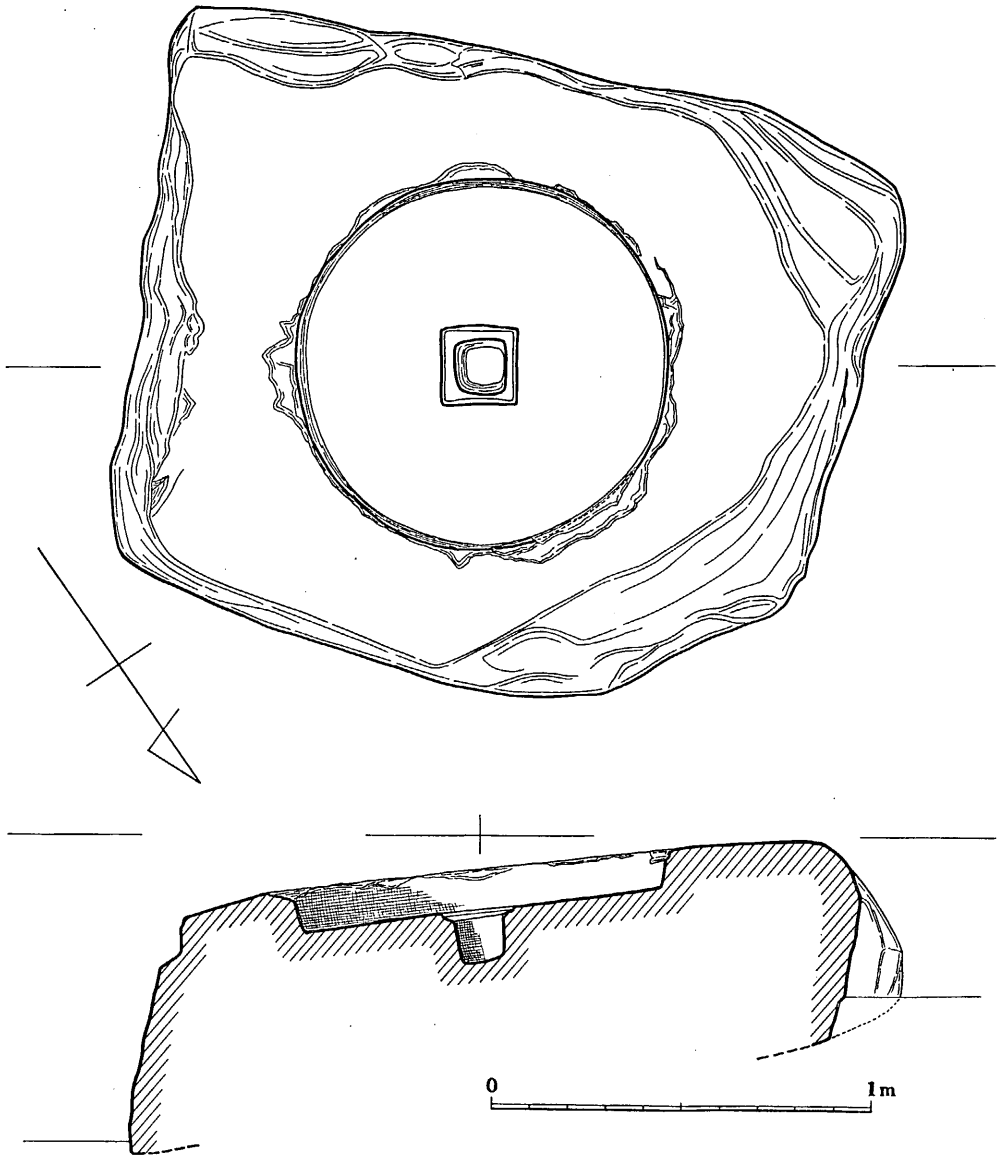
断面土層（第8図2）は、第2トレンチに比べて変化が多く、6区7区及び9区10区にかけて2ヶ所にピット状の落込みが発見されたが、前と同様その性格はわからない。7区8区には、多量の古瓦類が発見され、さらに道路敷設地区に向って延びていると観察されたので、7区8区を3.5 m拡張した。しかし遺構らしいまとまりもなく散布しているのでこれ以上の拡張は中止した。

第 5 塔 心 礎 第 9 図参照

現在 536 番地と 537 番地の畦境にある塔心礎は、今回調査の結果おそらく明治初期頃に原位置に動かされたものであることが確認された。昭和初年の石田茂作博士調査では「この礎石の現状を見るに、表面は完全に水平を保ち、其の埋蔵の程度等、それが原位置の儘である事を察すべく……」と観察されているところからすれば、現在表面が約 6 度の傾きをもって東南、乃ち 536 番地の低い水田の方に傾斜するようになったのはその後のことである。この礎石は東西と南北を対角線にとるようなほぼ方形をなす花崗岩の巨石を用いて加工されており、一辺約 1.8 m、厚さ約 60cm の大きさである。表面は平坦に仕上げ、中央に径 98cm (3 尺 2 寸 5 分)、深さ 11cm (3 寸 5 分) の円形柄穴がある。柄穴の縁辺は永い間に若干風化し或は欠けて角がとれているが原状をよくとどめているといえよう。柄穴底面では若干径が小さくなり、96cm となる。この礎石が注意されるのは柄穴径が 3 尺をこえる大きなものであることもさることながら、柄穴の中央に更に方形二段割りこみの小穴がみられる。乃ち上段は一辺 19.7cm (6 寸 5 分)、深さ 1.8cm (6 分)、下段では一辺長 13.9cm (4 寸 6 分)、深さ 13.9cm (4 寸 6 分)、深さ 12.4cm (4 寸 1 分) である。三段目穴の上面は水平でなく斜面をなし、穴の底部は壁面との接続が丸みをもって仕上げられている。この二段割りこみの穴が舍利奉安のための施設たることは多言を要しない。上段の割りこみは舍利納置後に蓋を被せるための造作であろう。石田博士の分類に従えば第一類、乃ち三段割りこみ式塔心礎でわが国塔心礎の形式上最古の位置に属するものである。これが九州地方でも殆んど類例のない特殊な形式であることは論をまたないが、それゆえに後世「塔原」の名称が伝えられたのもうなずけるであろう。

註 (1)石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」P.646 1936

(2)石田茂作「塔の中心礎石の研究」(伽藍論叢) 1948



第 9 图 塔 心 礎 实 测 图

第 6 遺 物

発掘によって発見された遺物は、瓦、須恵器、土師器であったが、瓦がその大半を占めていた。瓦は、土地所有者及び武蔵寺に一部採集保存されていたが、二形式に分類されたことは今回の調査まで注意されていなかった。

1. 古 瓦

第Ⅰ類に分類した瓦は、第Ⅱ類の2分1の程度出土量であった。全て須恵質の鼠灰色の堅く焼締ったものである。

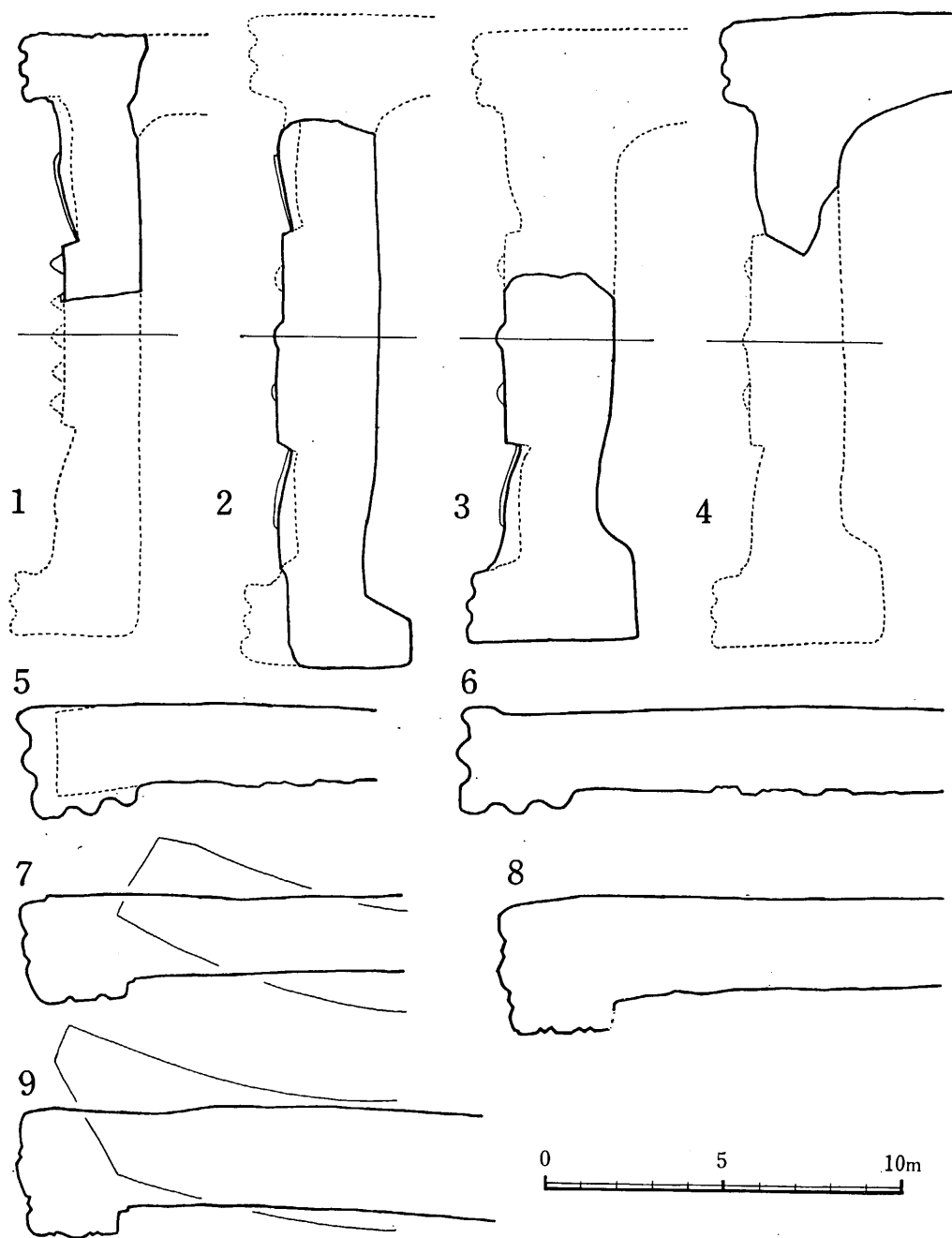
第Ⅰ類軒丸瓦 (第10図1、図版8上) 飾板は、三重弧文に囲まれ、8葉の単弁と、4+8の合計12個の蓮子を配した中房により形成されている。飾板の復元径は約17cm、中房は約5cmである。第Ⅱ類に比べ力強さを感じる。半円筒部は、外面に乱雑な細かい斜格子の叩目文(図版10—7)が施されている。また釘穴を持った破片もある。

第Ⅰ類軒平瓦 (第10図5・6・7、図版9上) 第Ⅰ類軒丸瓦とセットをなすものと考えられる。同様に須恵質の堅い焼きである。軒丸瓦の三重弧文と照応するように、この瓦当も三重弧文(二条の沈線)であるが、さらに顎下にも一条は瓦当と共有しながら三重弧文が施されている。この軒平瓦の下面には図版10—2のような太い方形の格子目文が施されている。瓦当の両端はまず直角に切られ、さらに巾せまく水平に切られる。完形品がないので全体の大きさを知ることはできない。

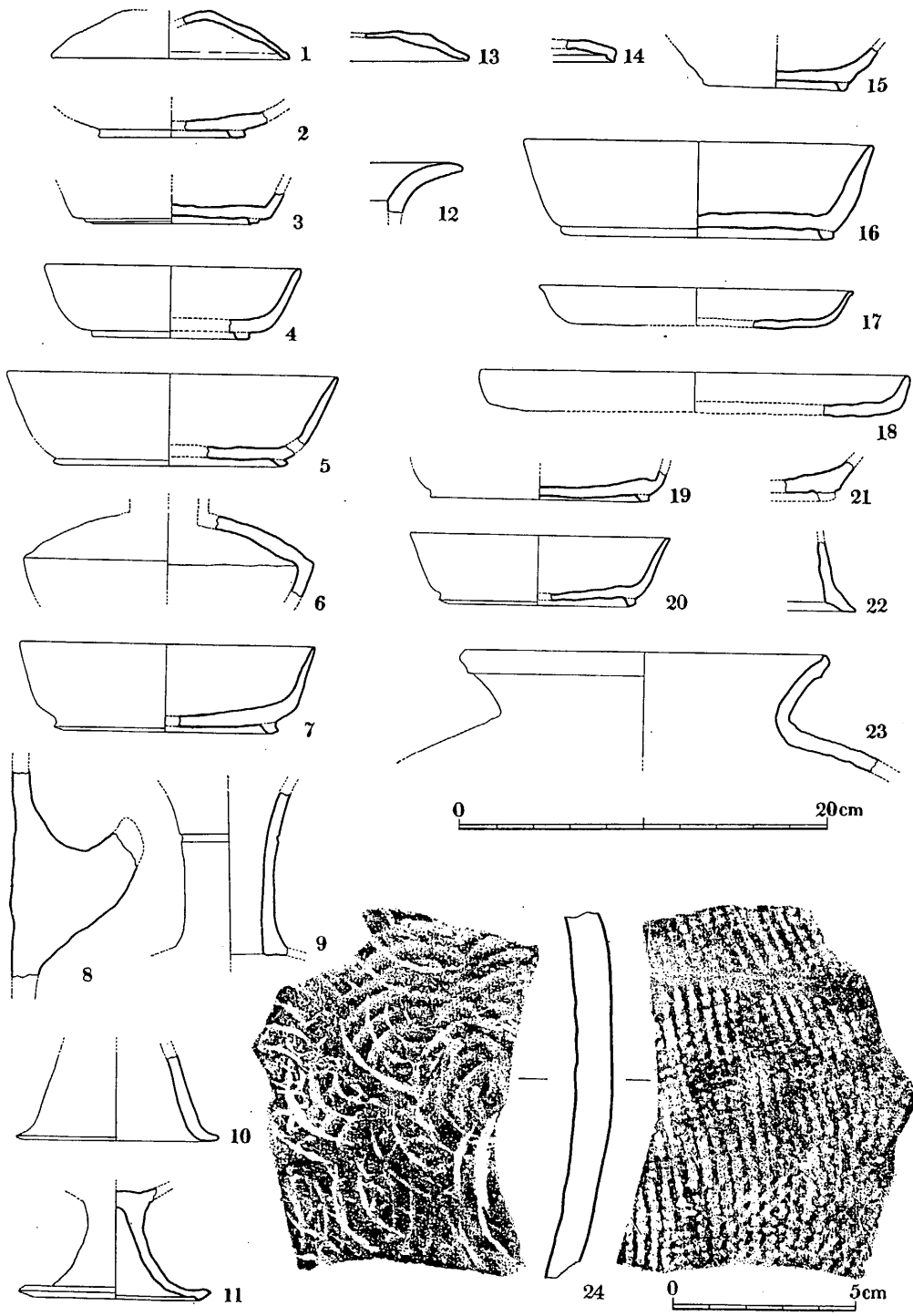
第Ⅱ類に分類した瓦は、第Ⅰ類に比べ焼度が低く、非常にもろい。最も多く出土したのはこの第Ⅱ類に類する瓦である。

第Ⅱ類軒丸瓦 (第10図2・3・4、図版8下) 第Ⅰ類と同様に、周縁は三重弧文が廻り、蓮弁の数及び作りもほぼ同じである。しかし中房の蓮子は1+6と少なくなり、さらに、周縁が凸出と同様に顎内面にも同様の凸出が施され、この時期の特徴を示している。飾板の復元径は18.5cm、中房径は6cmと第Ⅰ類軒丸瓦より大型である。しかし作風はやや力が弱い。半円筒部には、これとセットをなす軒平瓦に使用された格子目文と同様の、一見縄目文と間違えるような小さな格子目文が施されている。

第Ⅱ類軒平瓦 (10図8・9、図版9下) やはり三重弧文と云えるが、その二条の落込部にはさらに小さな突起があり、厳密には五重弧をなしている。このことは顎下面にも同様である。瓦当の両端は、まず直角に切られ、さらに下方を斜めに切っているために刀の切っ先を見るようである。



第10圖 出土軒先瓦実測図



第11图 出土土器实测图

両形式は、同時に出土することから時期的に一連のもの、あるいは同時期とも考えられるが、形式的に第Ⅰ類が先行すると考えてよいであろう。

前記の丸、平瓦に施された叩目文及び格子目文の外に3種類の格子目文(図版10—3・4・5・6)がある。瓦当の部分は一つもない。出土量も極めて少量であった。

2. 土 器

出土した土器類は、須恵器と土師器に分類される。その出土量は30片にも満たないが、各々半数を占めている。以下、第11図に付した番号をもって記述する。

須恵器杯 (2～4・15・16・19・20) 4・20に見るように口径14cm、高4cmとごく普通の大きさのものと、16のように口径19cm、高5.4cmと大型のものがある。全体に杯の器形は、高台が外方に張り、高台から口縁に移行をはじめ部分が強く張るのが特徴である。

これらの杯に伴う蓋は1・14である。1は焼成が悪く歪んでいる。14の口縁はく字形に内向する。

須恵器長頸壺 6は肩の部分で、胴部から肩にかけて鋭く反転している。9は頸の部分で、一条の沈線で飾られている。

須恵器甕 23は口径20cmのやや大型の甕である。24は胴部で、内外に青海波文と叩目文がある。

土師器杯 5は復元口径18cm、高5cmの土質の良いものである。須恵器の形態に類する。蓋としては13があるがこれも須恵器的手法である。

土師器高杯 10・11・22・の3片が出土した。すべて脚部片である。11は脚径10cmの裾部がく字形に内向している。

土師器甕 強く外反した口縁部12。

土師器甌 把手8がある。

土師器盤 17は復元径17cm、高2cmの瓦器的な灰色をしている。口縁はやや外反する。18は器壁が厚く、口縁部は外反しない。復元径23.4cm、高さ2.2cmを数える。

以上の土器類の中で最も年代を示す特徴をもつものは須恵器の杯及び長頸壺で、7～8C前半と考えられる。終末期古墳から多く出土する器形である。近年北九州におけるこの種遺物の出土例は、佐賀県鳥栖市所在の東十郎古墳(註)がある。

註 佐賀県教育委員会「東十郎古墳」1966

第 7 塔原廃寺をめぐる諸問題

塔原廃寺については単に遺跡、遺物について特異な位置をめぐるだけでなく、古代史の文献の方面からも関連する問題が提起されている。従ってこれらの問題の経緯をまとめると共に現段階での所見を記して塔原廃寺の歴史的な意義を明らかにしておこう。本書ではこれらの問題について詳細に論考するのは別の機会にゆずることとして、概要を記すにとどめる。

1. 般若寺創立問題

「上宮聖徳法王帝説」裏書に

曾我日向子臣、字無耶志臣、難波長柄豊碕宮御宇天皇之世、任筑紫大宰帥也、甲寅年十月癸卯朔壬子、為天皇不豫、起般若寺云々、奈良京時定額寺云々(1)。

この記事は大化改新によって右大臣の要職にあった蘇我倉山田石川麻呂の異母弟蘇我臣日向が孝徳天皇の世、筑紫大宰帥に任じられたが、「甲寅年」乃ち孝徳天皇の白雉 5 年（654）10月壬子（10日）、天皇崩御されたのでその冥福を祈って般若寺を建設するにいたった。そうして奈良時代に下って定額寺になったということを伝えている。「日本書紀」によれば大化 5 年（649）3月、蘇我臣日向は大宰帥に任じられていてこの記載は信ずるに足る。また同じく書紀によれば日向は字を「身狭」、「武蔵」、「身刺」等と記されていて「無耶志」乃ち「ムサシ」と称されていたことが知られる。この蘇我臣日向なる人物については大化改新前後にかけて古代史の上でも興味ある動向がたどられるが、ここではふれないこととする。ところでこの般若寺の所在地をめぐる大和説と九州説の二説がある。大和説は古く江戸時代に狩谷枚斉がその証註で記して以来、「大和志料」などにひきつがれた。枚斉は次の如く述べている。

大和志云、般若寺在奈良般若寺村、元亨釈書云、觀賢開般若寺、大和櫛志之、旧跡幽考云、聖武帝建並誤、蓋是寺、白雉五年、曾我日向勅建立、至聖武帝、為定額官寺、延暦遷都後稍荒敗、於是、延暦年中、觀賢重修也(2)。

枚斉は聖武朝に觀賢開基という旧説を延暦年中重修と改めて、創建年代を白雉 5 年までひきあげたわけである。

以上の大和説に対して疑問を提起したのは福山敏男博士で、福岡県筑紫郡太宰府町片野にある般若寺跡を注意され、更に塔原廃寺跡の塔心礎に対しても白鳳様式の瓦が出土することと共に注意しておく必要があることを述べられた(3)。これを考古学資料、特に古瓦類を加えて九州説を主張されたのは田中重久氏である(4)。田中氏は従来の大和説を検討して、般若寺に関する記述の混乱は鎌倉時代に始まること、大和にある奈良坂般若寺の創立は天平年間にあることをあげられて、法王帝説にいう般若寺は筑前般若寺であると云われた。



～第 12 図 塔原廃寺(左)大和・禪寂寺(右)の塔心礎舍利穴

しかしながら筑前般若寺にしても奈良朝以前にのぼせうる古瓦資料を欠いていて積極的に証明することができない。筆者はこの点に長らく疑問を残しながらも、法王帝説の裏書に般若寺を起した記事が記録の体裁上連続して書かれているところに九州説とみるのが正しいと考えていた。そこで塔原廃寺の塔心礎と古瓦が従来云われているように奈良朝以前に比定できるとして、この遺跡に出土する単弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組合せが——今回の発掘調査までは第二類の軒先瓦のセットが知られていたのであるが一畿内における山田系軒先瓦の変化したものと考えて、記録に伝える蘇我日向創立の般若寺を塔原廃寺に考えたのである。また、塔原廃寺が大宰府条坊の郭外にあることも参照して、大宰府条坊制が整備された奈良時代の段階で郭内に移建されて大宰府町般若寺が成立し、寺名を伝えたのであろうと考えた。このような例は畿内にけおる飛鳥寺と奈良元興寺、元薬師寺と奈良薬師寺の関係にみることができる。奈良朝以前の寺には地名、創立者名を寺名とする場合が多い。塔原廃寺と武蔵寺の関係を考えるならば、更に一步をすすめて創立当時には蘇我日向臣の字をとって、「ムサシ」寺と称されたのではなかろうかとすら考えられる。また移建後は元般若寺と称されるような時期があったかも知れない。本稿ではこれまでに筆者の到達した結果を要述するにとどめ、更に次項で塔心礎、古瓦の考察から補強しておくこととする。

註 (1)本文は狩谷椽斎の証註本に従った。

(2)狩谷椽斎全集第八(日本古典全集刊行会版)1928

(3)福山敏男「般若寺の創立に関する疑問」(歴史地理62巻5号)1933

(4)田中重久「般若寺草創攷」(正史地理61巻6号)1933

同 「聖徳太子建立四十六院の遺跡」(聖徳太子御聖蹟研究所収)1944

2. 塔心礎と瓦当文の系統

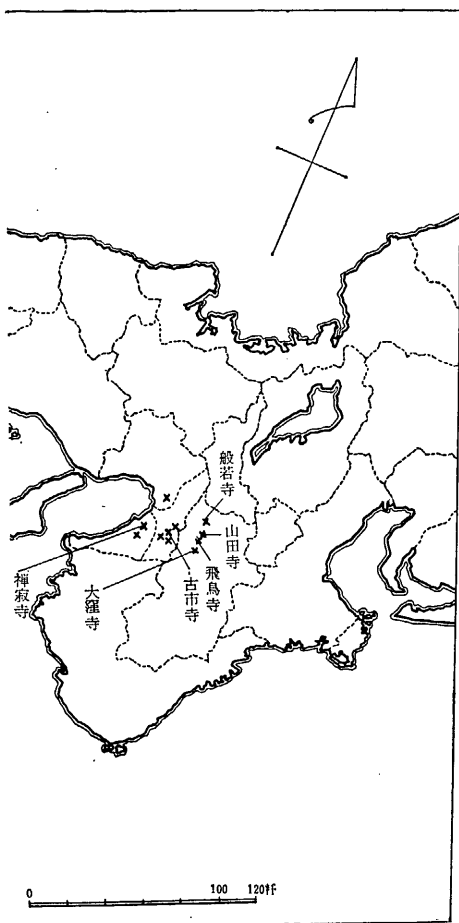
塔原廃寺跡の塔心礎及び出土瓦は九州地方でも殆んど類例をみないものであったから早くより識者の注意にのぼっていた。心礎の枿穴3尺をこえる大きなものである上に舍利穴を設け



第13図 塔原廃寺関係遺跡分布

ている特殊な構造のものであり、瓦当文も太宰府地方に流行した老司系、鴻臚館系とも異質で類品のないものであったからである。

九州地方で知られている塔で径3尺以上の枘穴をもつものは筑前国分寺の3尺6寸2～3分と測定されているものがあるだけである(1)。また塔原例のような舍利穴をもった三段式割りこみある塔心礎は飛鳥、白鳳時代の畿内及びその周辺にみられ、二段式の舍利穴にしても塔ノ原例の如く二段とも方形の場合、円形中に方穴を穿つ場合がある。石田茂作博士は塔心礎の枘穴形態による分類を試みられて六類とされ、三段式のものはその第一類に数えられている。この中で塔原例と同じ二段方穴舍利穴をもつのは和泉禅寂寺(3)(第12図)の例があり、また近年調査された大和飛鳥寺(4)の例がある。更に大和大窪寺(3)は円形方穴の舍利穴をもっている。九州地方で舍利穴ある例は豊前上坂廃寺と肥後悟真寺が知られていて、共に一重の円形舍利穴がある。このようにみてくれば塔原廃寺の塔心礎は畿内に類例をたどることができるのである。



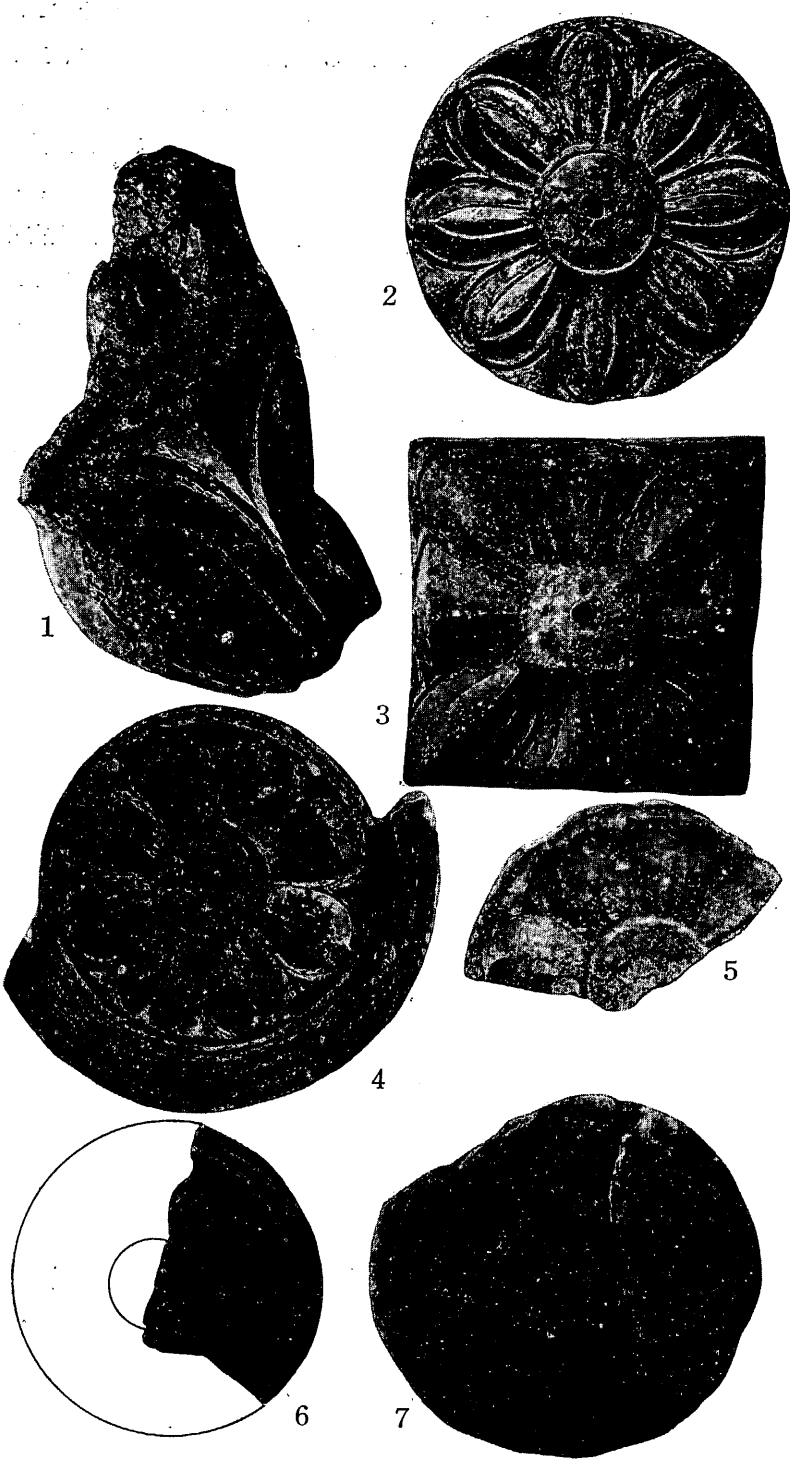
要 図

一方、塔原廃寺の瓦当文も大宰府地方では特異なものであるが、北九州でも近年二、三の類品(第14図)が発見されてその系統を考えられるようになった(5)。先ずあげられるのは筑前筑紫郡春日町上白水発見の軒丸瓦二点である。これは塔原例に最も近似するが、様式上古く位置づけられよう。乃ち上白水例は各弁内の二個の子葉が中央に接近し、中房内蓮子が1+8の配列をとって、塔原例はこれから脱化したものと云える。次にあげられるのは筑後三井郡小郡町井上と同町北薬師堂から発見された極先瓦と鬼板瓦である。これは各弁の中央部が盛り上って稜をなし子葉を相似形的に重ねた重弁文単弁式文様で、一見して畿内の白鳳時代前半に流行した山田寺(古市寺)系瓦当文の系統に属する整美なものである(6)。すでに山田寺系重弁瓦当文から法隆寺系複弁瓦当文が形成されることが指摘されているのと同様な変遷をたどって上白水例が生れ、更に塔原例へと脱化していったと考えられる。従って塔原瓦当文の祖型は畿内の山田寺系瓦当文に求められよう。この考察は軒丸瓦の周縁に三重弧をめぐらすこ

と、更にセットをなす軒平瓦が三重弧文であることから支持されよう。

ひるがえって塔原廃寺と同様な塔心礎に方形舍利穴をもった畿内の飛鳥寺や大窪寺にも山田寺系瓦が使用されており(3)、また蘇我日向臣の異母兄である蘇我倉山田石川麻呂が建立した大和山田寺は最もこの系統瓦当文の指標たりうる遺跡である(3)。「上宮聖徳法王帝説」の裏書によれば、山田寺は辛丑年(641)に着工して金堂、次いで塔の完成したのは丙子年(676)である。このように塔心礎、瓦当文の両面からする観察も蘇我氏系寺院であることを支持できるもので、この点からも前項で述べた記録にみえ般若寺を塔原廃寺に比定することは妥当であろうと考える。塔原廃寺の年代は所謂大宰府系古瓦を出土せず、山田寺系瓦の変化少ない二期にわたる変遷をたどって廃滅したことをみれば白鳳時代後半から奈良朝初期を下らない間、乃ち7世紀後半に建立され、8世紀初めを下らない時期に廃絶したのであろう。

註 (1)鏡山猛「筑前国分寺」(国分寺の研究下巻)1938



- (2)石田茂作「塔の中心礎石の研究」(伽藍論攷) 1948
- (3)石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1936
- (4)「飛鳥寺」(奈良国立文化財研究所学報第五冊) 1958
- (5)小田富士雄「九州に於ける山田寺系種先瓦の発見」(歴史考古6) 1961
- (6)藤沢一夫「摂河泉出土古瓦の研究」(仏教考古学論叢) 1941
- (7)藤沢一夫「飛鳥期瓦の再吟味」(考古学7巻8号) 1936
同「法隆寺瓦一組の年代に就いて」(綜合古瓦研究第一分冊) 1938

第 14 図 北部九州出土山田寺系古瓦
 (1~3井上廃寺跡出土の鬼板瓦及び種先瓦 4.5上白水出土軒瓦丸瓦, 6・7武蔵寺出土軒瓦丸瓦)

付 1 塔原廃寺関係文献目録

〔I〕 直接塔原廃寺に関する文献

- 貝原篤信「筑前國統風土記」（福岡県史資料続第4輯）1943
中山平次郎「古瓦類雑考ゆ」（考古学雑誌7巻4号）1916
石田茂作「武蔵寺」（飛鳥時代寺院址の研究）1936
鏡山猛「北九州の古代遺跡」1956

〔II〕 研究上関連ある参考文献

- 狩谷掖齊全集第八（日本古典全集）1928
田中重久「般若寺草創攷」（歴史地理61巻6号）1933
福山敏男「般若寺の創立に関する疑問」（歴史地理62巻5号）1933
藤沢一夫「飛鳥期瓦の再吟味」（考古学7巻8号）1936
 〃 「法隆寺瓦一組の年代に就いて」（総合古瓦研究第一分冊）1938
 〃 「摂河泉出土古瓦の研究」（仏教考古学論叢）1941
花山信勝・家永三郎校訳「上宮聖徳法王帝説」（岩波文庫）1941
田中重久「聖徳太子建立四十六院の遺跡」（聖徳太子御聖蹟の研究）1944
石田茂作「塔の中心礎石の研究」（伽蓋論攷）1948
太田古朴「般若寺」1960
篠久嗣郎「筑後井上廢寺の蓮華文鬼瓦」（九州考古学11・12）1961
小田富士雄「九州に於ける山田寺系極先瓦の発見」（歴史考古6）1961
 〃 「九州初期寺院址研究の成果」（古代文化17巻3号）1966

付 2 武蔵寺伝説

—塔原廢寺の周辺—

万葉集に大率帥大伴旅人が妻を恋して詠だ次の歌がある。

湯の原に 鳴く蘆鶴は わが如く
妹に恋ふれや 時わかず鳩く

この句の湯の原は次田（すきだ）の温泉のことで、現在は武蔵（または二日市）温泉の名で呼ばれているが、武蔵寺はこの温泉とともに面白い伝説がからまっている。

それは、孝徳天皇のころ登羅磨という人が次田というところにいた。ある夜仏托を受けて大椿樹に葉師如来を刻み、椿花山武蔵寺なる寺を建立した。また信心することにより一女を給ったが、その子が疫病にかか^つしまった。ところが登羅磨は、またまた仏のお告により温泉を発見し、これに娘を沐浴させると忽ちにして全快した。時に白雉4（653）年であった、という。これが武蔵寺縁起略記にいう武蔵寺草創及び次田の湯発見の由来である。登羅磨伝説を全て信ずることはできないが、その孝徳天皇の頃というのは塔原廢寺跡の年代と一致するものであ

る。

また、貝原篤信の「筑前続風土記」の「武蔵村」項によれば、武蔵寺椿花山成就院と号す。本尊は葉師仏也。伝教大師、御笠郡山口村木屋町山より12枚有山茶を切取って、此仏を刻めりと云う。此武蔵寺は虎丸長者と云う者造営し、むかしは大寺にて堂塔も多く、子院七坊有しと云う。正法寺、善正寺、宗正寺、蓮花寺、地藏坊、石水坊、池上坊是也。池上坊は日蓮宗の僧、武蔵国池上より来り住る所也と云う。今に其跡あり。伝説に虎丸長者此寺を造立せしとき、いまだ成就せずして死す時に武蔵国池上より日蓮宗の僧来りて作り終りぬる故に、武蔵と号し、村の名をも武蔵といへりと云う、と武蔵寺の来歴を語っている。石田博士は武蔵寺を伝教大師開基の伝説のあることから、平安初期仏教の山間閑寂処に営まれる流行により塔の原廢寺から今の寺の東隣台地に移建され、現在の武蔵もその位置から旧武蔵寺の一支院かと思われる。それが武蔵寺の名を継ぐに至ったのは本寺の退転したためであろう、とのべられている(註)。

現武蔵寺境内より出土する遺物として同寺に保存されている古瓦は鎌倉時代のものである(第15図)。

調査団は、塔原廢寺般若寺移建説をとるものであるが、いずれにせよ武蔵という地名の残存及び伝説に現われる孝徳天皇なる年代は、蘇我臣日向身刺と塔原廢寺跡との強い関連を考えずにはいられない。

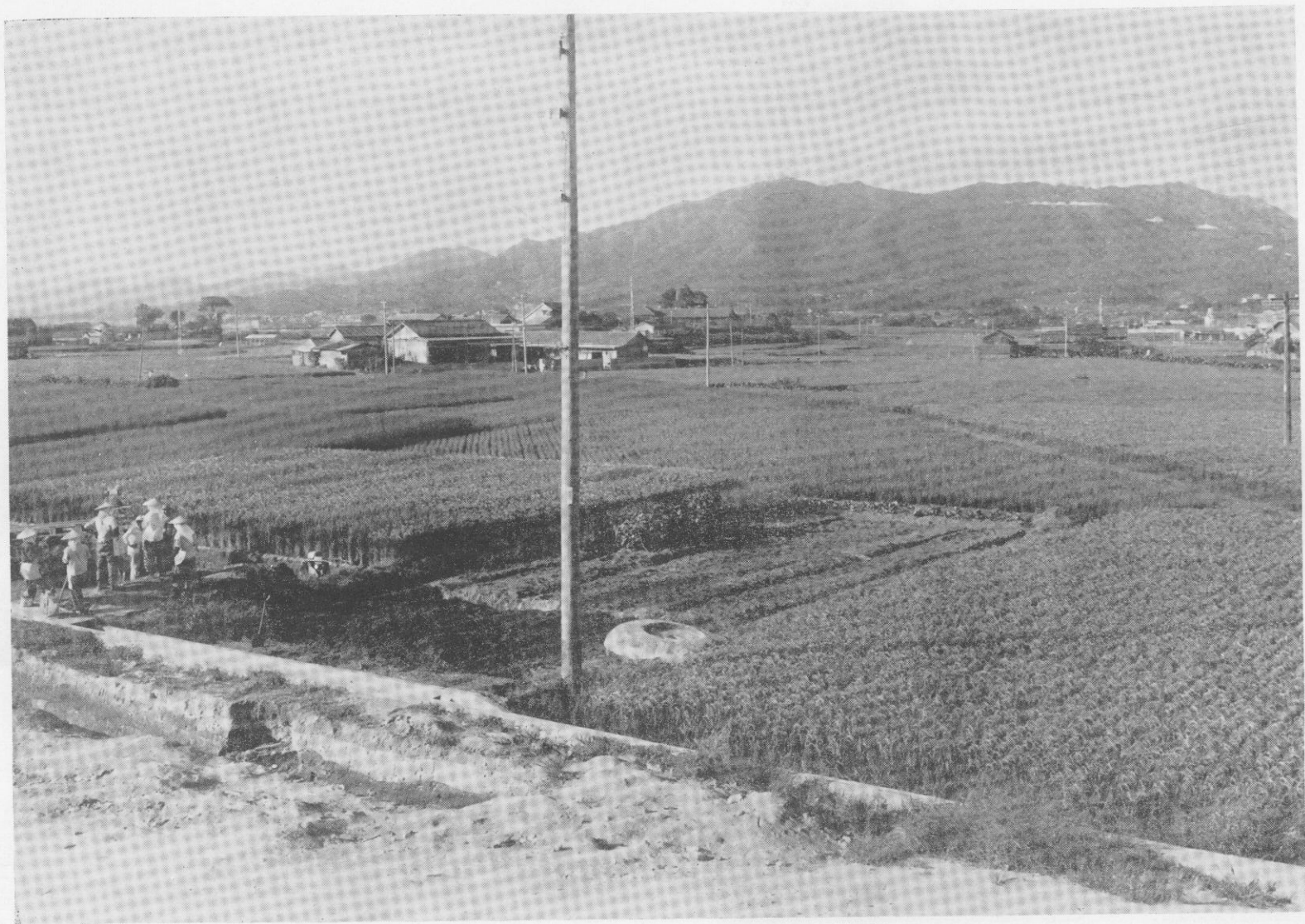
註 石田茂作「武蔵寺」(飛鳥時代寺院址の研究)1936



第 15 図 武蔵寺境内出土軒先瓦(鎌倉時代)

圖

版



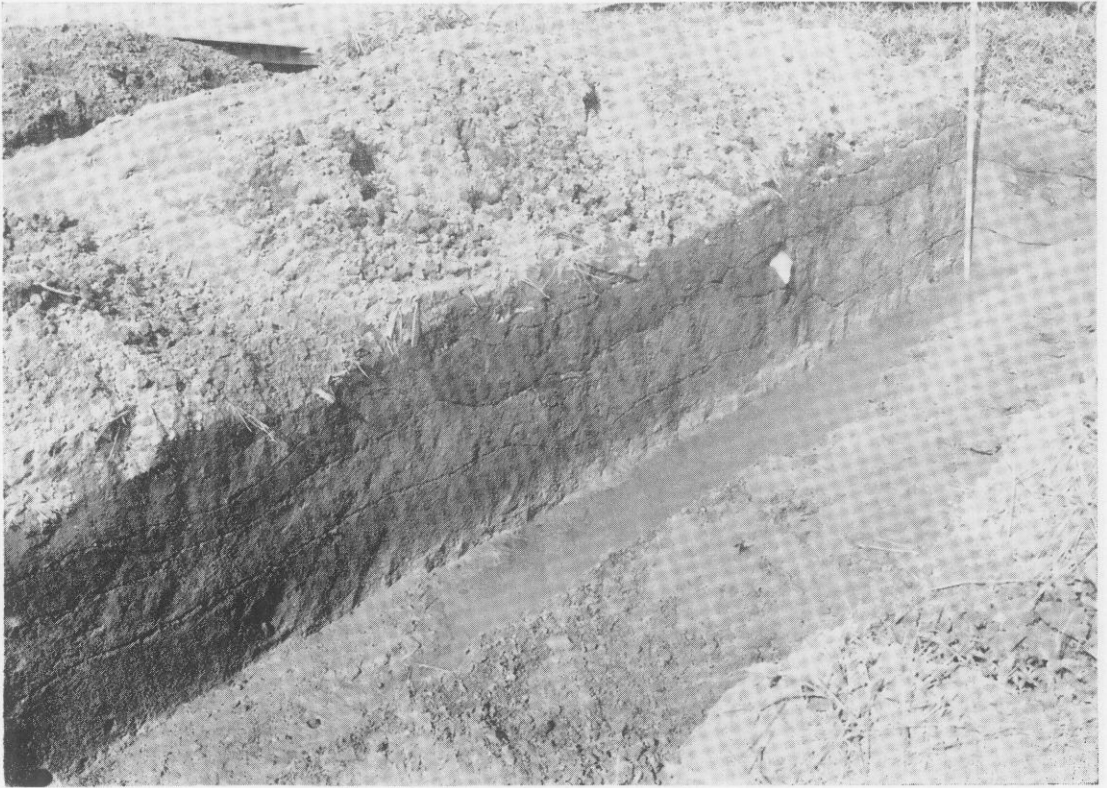
遺跡全景 (大宰府、大野城を望む)



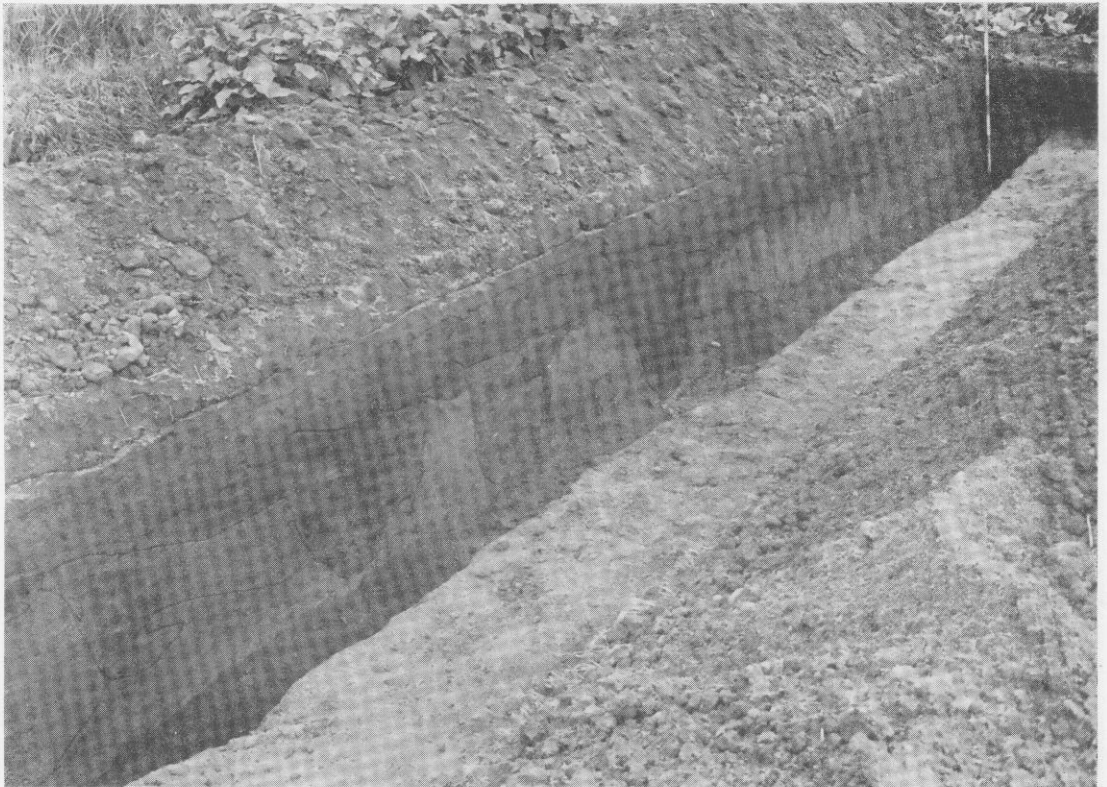
A 第1トレンチ1～15区東壁と
発掘終了後の状況（北より）



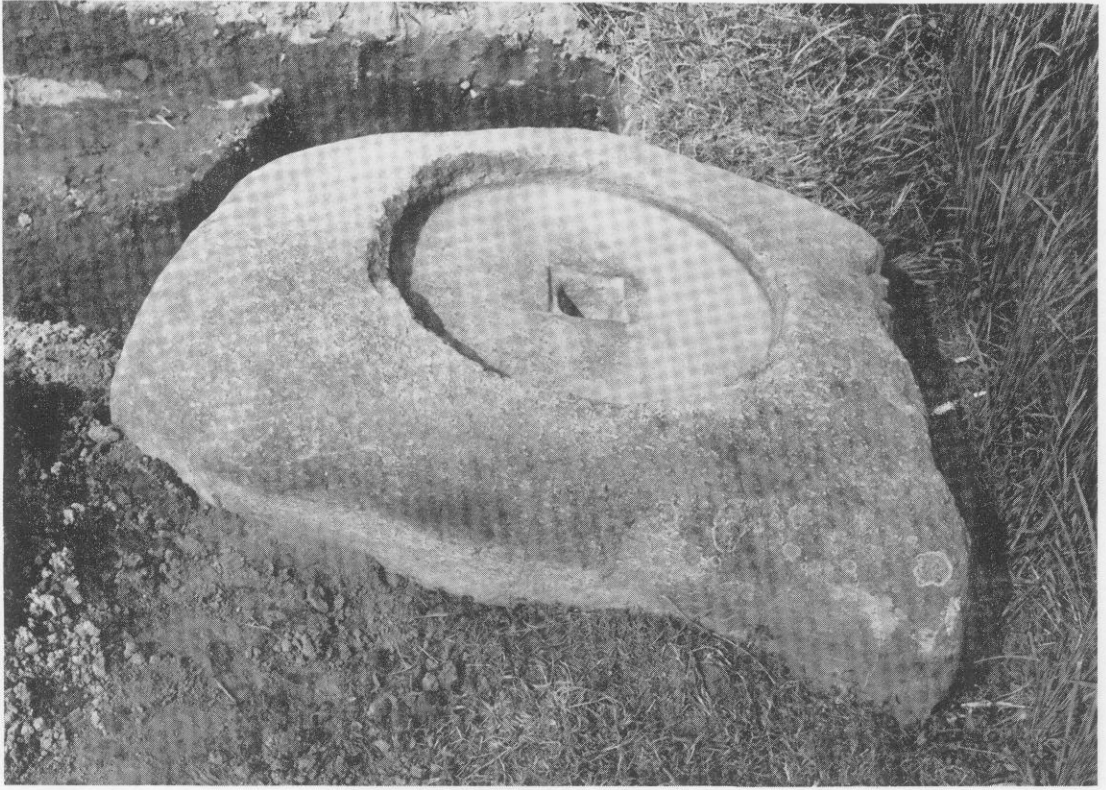
B 第1トレンチ3区瓦溜出土状
態（西より）



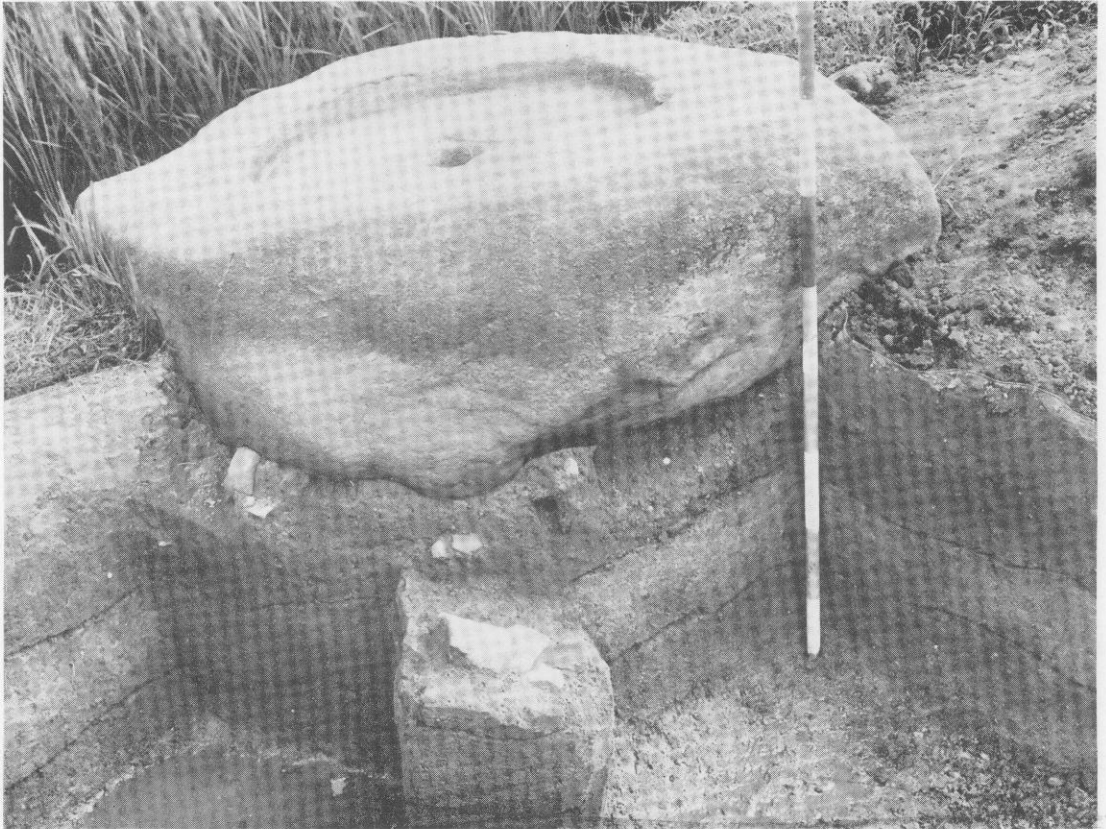
A 第二トレンチ西壁の土層（東より）



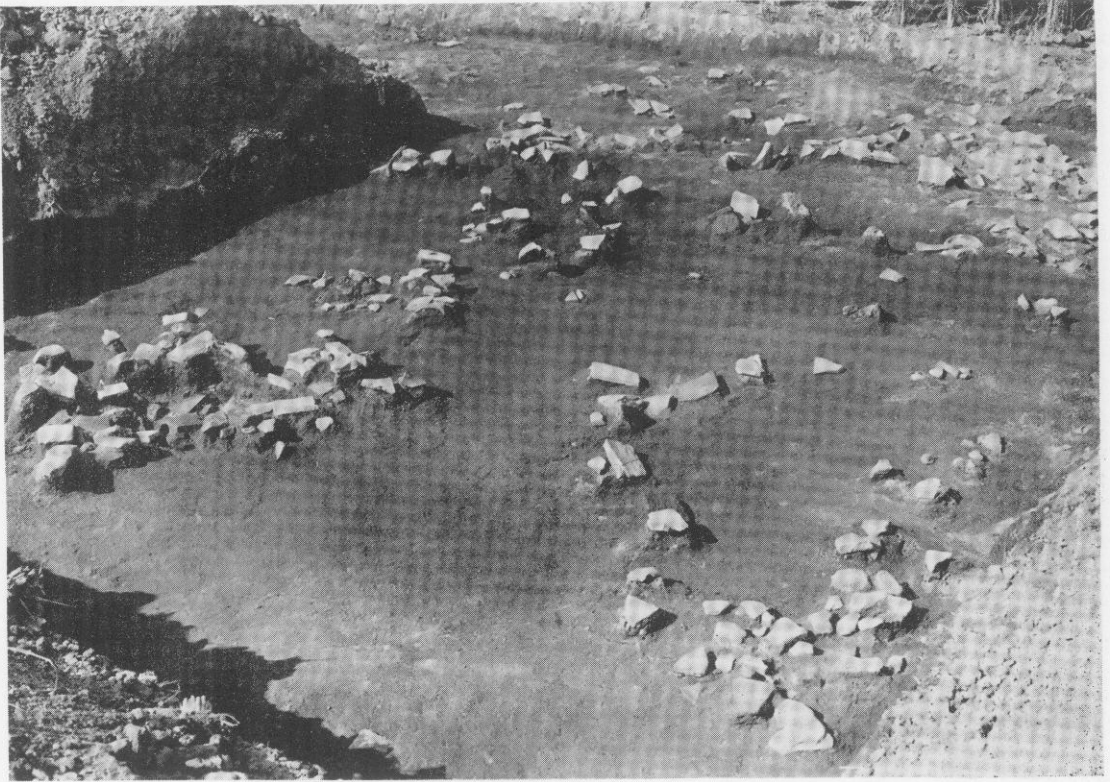
B 第四トレンチ北壁の土層（南より）



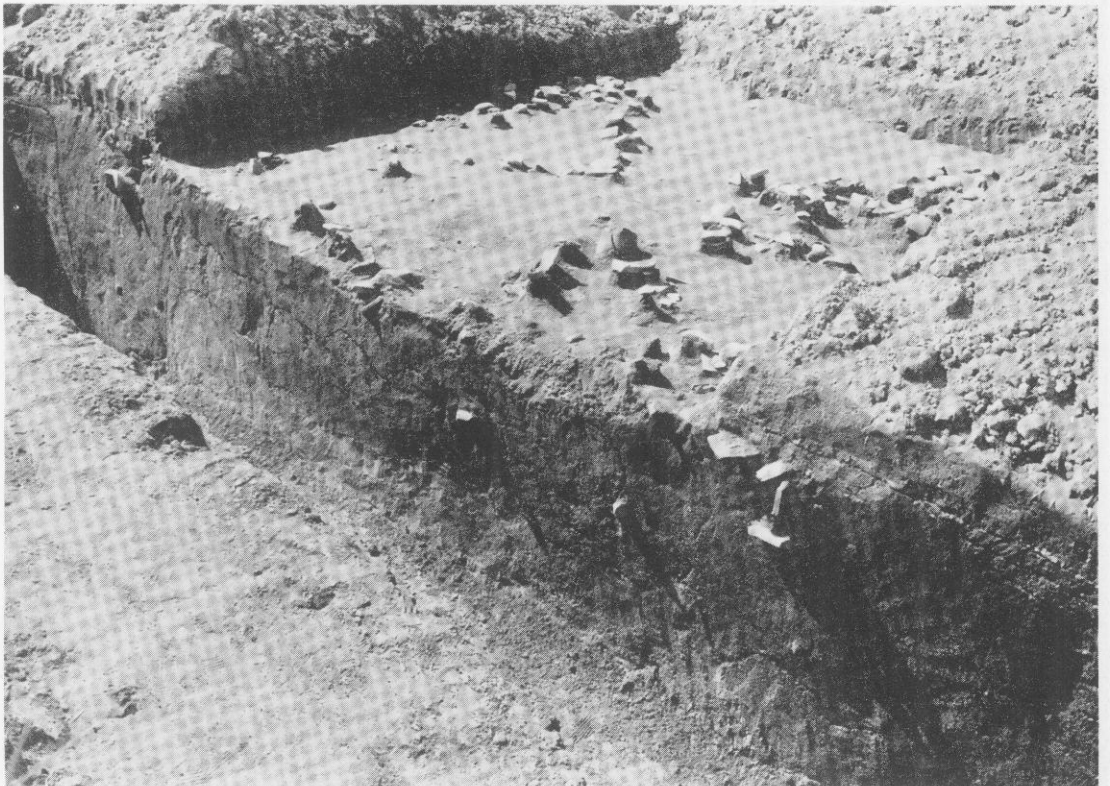
A 塔心礎 全 景 (南上より)



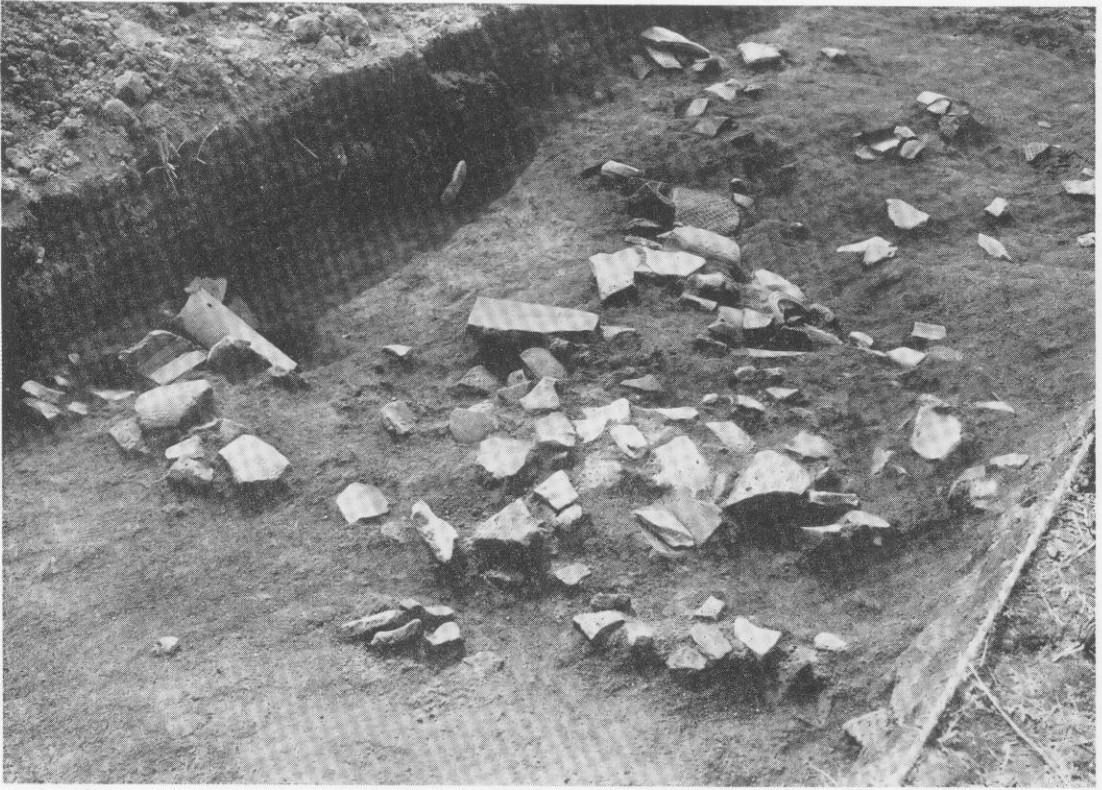
B 塔心礎と第2 トレンチの土層調査状況 (北より)



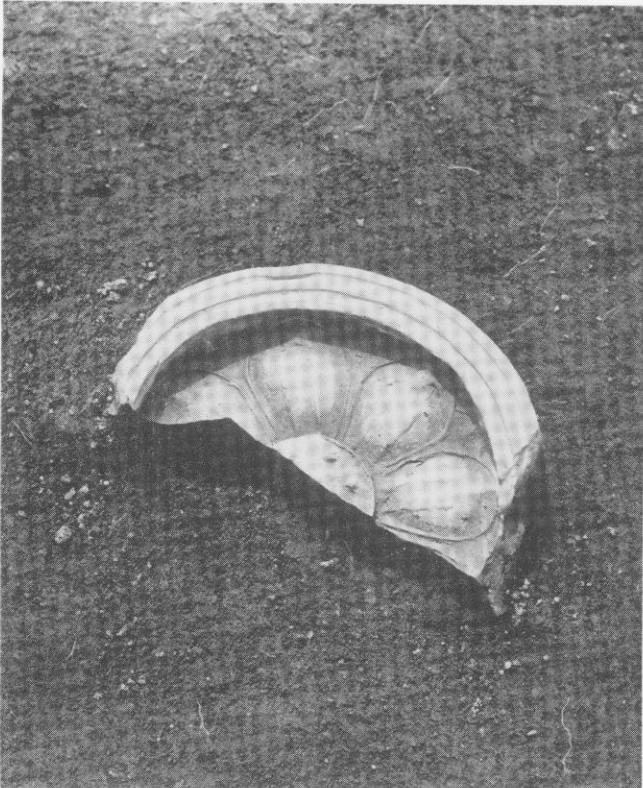
A 第三トレンチ及び拡張区の遺物出土状態（西より）



B 第三トレンチ西壁の土層及び拡張区の状態（北より）



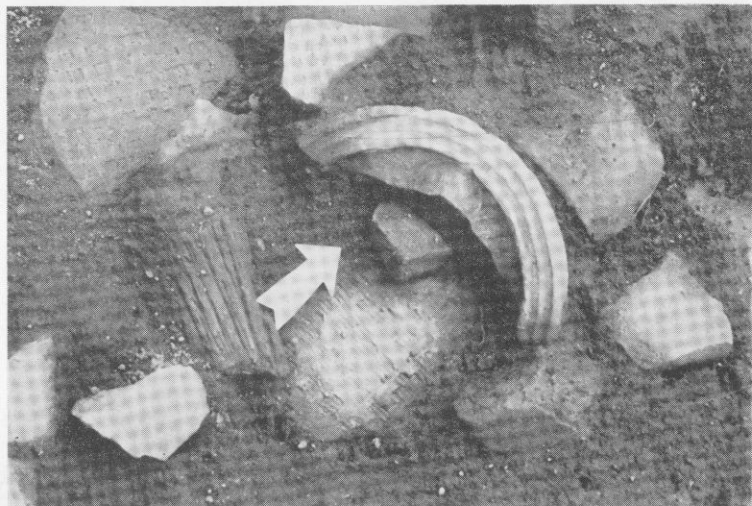
A 第三トレンチ7~8区の古瓦出土状態



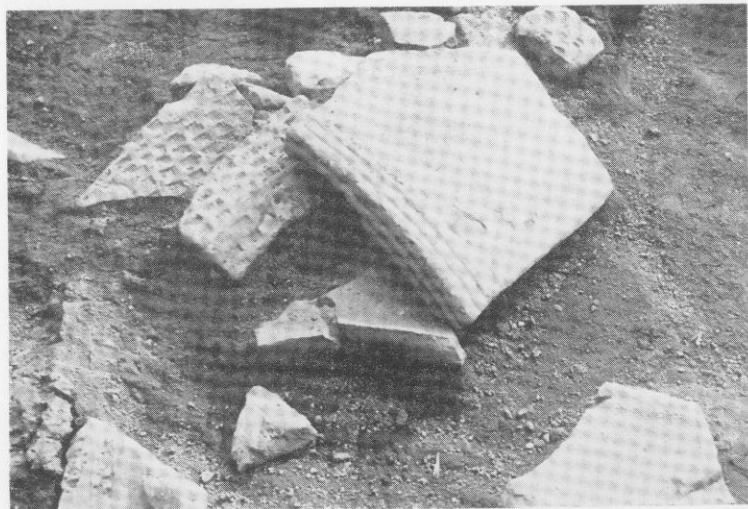
B 第1トレンチ15区軒丸瓦片出土状態



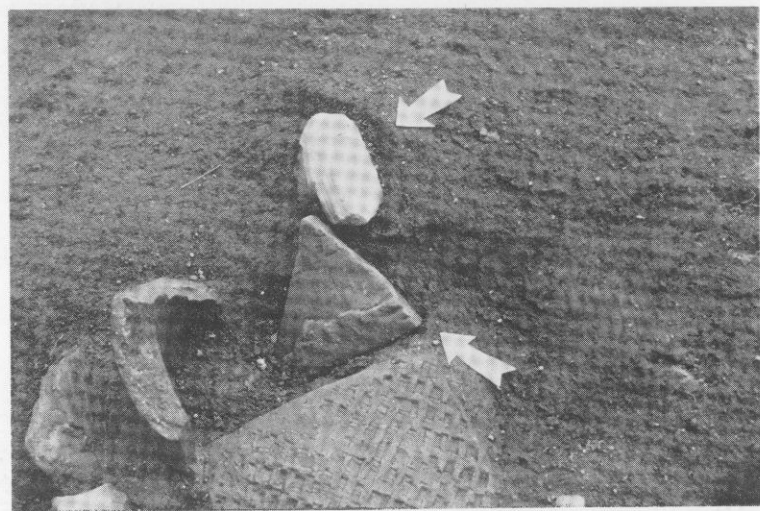
C 第1トレンチ14区长頸壺片出土状態



A 第3トレンチ7区軒丸瓦出土状態（盗難にあい現在なし）



B 第3トレンチ8区軒平瓦出土状態



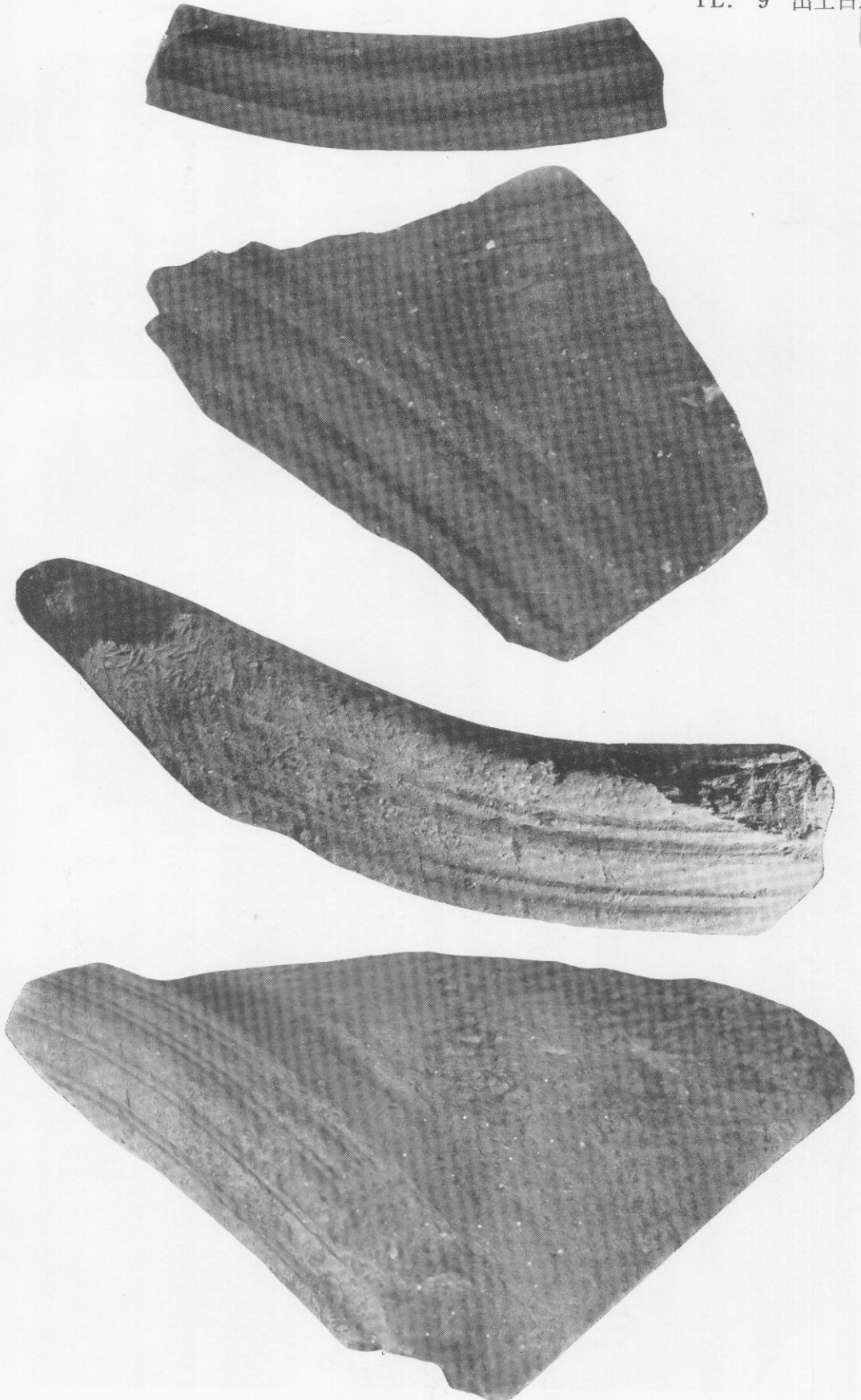
C 第3トレンチ8区軒平瓦出土状態



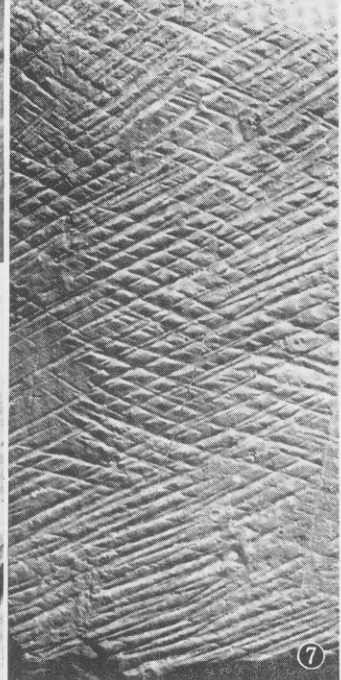
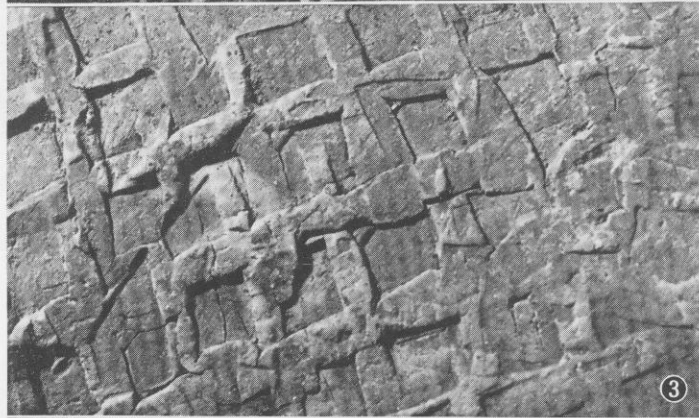
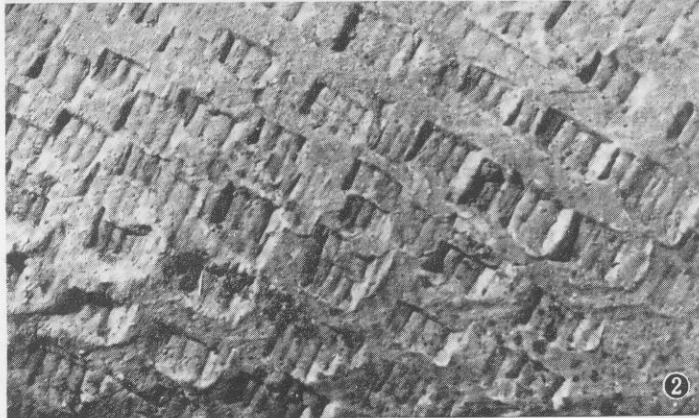
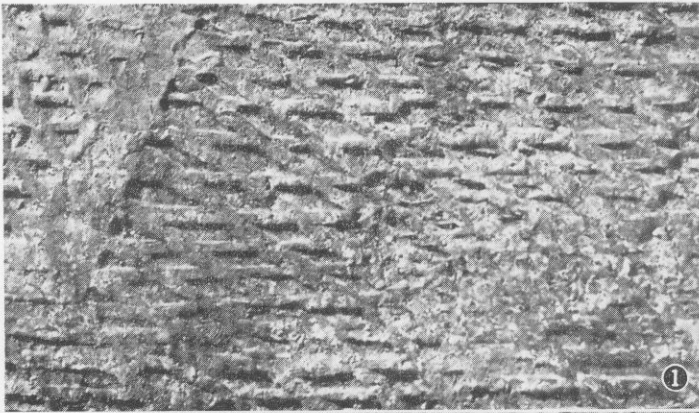
D 第3トレンチ拡張区須恵器出土状態



軒丸瓦 (上・第I類, 下・第II類)



軒平瓦 (上・第I類, 下・第II類)



平瓦格子目文の各種 (実大)

福岡県文化財報告書

第35集

昭和42年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 柴藤印刷株式会社

福岡市荒戸1丁目1番1号